

北大時報

March 2010

No.672

平成22年

3

**電子科学研究所 竹内教授が
日本学術振興会賞を受賞**

**工学研究科 加賀屋教授と
遺伝子病制御研究所高田教授が
北海道科学技術賞を受賞**

**北海道大学一般選抜第2次
入学試験(前期日程・後期日程)の
実施と合格者の発表**

お知らせ

- 平成22年度総合博物館の開館時間・休館日
ならびに臨時休館日のお知らせ



「第2次入学試験前期日程の合格発表」(2010.3.6, 関連記事6頁に掲載)

目次

全学ニュース

- 電子科学研究所 竹内教授が第6回日本学術振興会賞を受賞…………… 1
- 工学研究科 加賀屋教授と遺伝子病制御研究所 高田教授が平成21年度北海道科学技術賞を受賞…………… 2
- 農学部本館がBELCA賞ロングライフ部門を受賞 …… 4
- 医学研究科 白土教授に最先端研究開発支援プログラム配分額決定 …………… 5
- 平成21年度知的財産セミナーを開催…………… 5
- 北海道大学一般入試第2次入学試験（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表催…………… 6
- ドイツ・ブレーメン大学と大学間交流協定を締結… 9
- JICA本部に提言書を提出：「水・衛生分野における国際協力に関する提言」…………… 10
- 第5回「北大・九大合同フロンティア・セミナー」開催…………… 11
- 北大フロンティア基金…………… 12
- （財）北海道大学クラーク記念財団への寄附………… 13
- ICT活用教育セミナーを開催…………… 14
- 平成21年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催 16
- 留学生センター日本語研修コース修了（2009年10月入学者）…………… 17

部局ニュース

- 工学研究科がブルキナファソ国際水環境技術学院と部局間交流協定を締結…………… 18
- 農学研究院が弘前大学北日本新エネルギーセンターとの連携協定を締結…………… 19
- 触媒化学研究センターが英国カーディフ大学カーディフ触媒研究所と友好学術交流協定を締結 …………… 20
- 北海道大学病院 がん診療連携拠点病院主催事業「高度ながん早期診断法に関する研修会・合同カンファレンス」を開催…………… 21
- 駐日米国大使ジョン・ルース氏とディスカッション …… 22

- 国際会計基準審議会（IASB）理事の講演会を開催… 23
- 公認会計士・監査審査会会長の特別セミナーを開催… 24
- 「おしよろ丸就航100周年記念事業」写真パネル展の第6回巡回展を開催 …………… 25
- 附属図書館で「北大生の学生群像（第Ⅱ期）」展を開催 …………… 26
- 第4代総長 今裕の墨蹟を受贈 …………… 27
- 総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催 …… 28
- 総合博物館土曜市民セミナー「アンモナイトに取り憑かれて」が開催される…………… 29
- 北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催…………… 30

お知らせ

- 平成22年度総合博物館の開館時間・休館日ならびに臨時休館日のお知らせ…………… 31

北大を去るにあたって

- …………… 32

寄稿

- 北大での研修を通じて感じたこと…………… 63

告示

- 北海道大学告示第1号（平成22年3月1日）………… 64

表敬訪問

- …………… 65

諸会議の開催状況

- …………… 67

学内規程

- …………… 68

人 事

- …………… 68

全学ニュース

電子科学研究所 竹内教授が第6回日本学術振興会賞を受賞

電子科学研究所教授 竹内繁樹氏が「光子を用いた量子情報通信処理の創成」の功績により、第6回(平成21年度)日本学術振興会賞を受賞されました。

この賞は、日本学術振興会が、我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルにおいて発展させるため、創造性に富み優れた研究能力を有

する若手研究者を早い段階から顕彰し、その研究意欲を高め、研究の発展を支援することを目的に平成16年度に創設したものです。

授賞式は3月1日(月)に日本学士院で行われました。

受賞にあたっての同氏の功績等を紹介します。

(総務部広報課)



略 歴 等

平成3年3月	京都大学理学部卒
平成5年3月	京都大学大学院理学研究科修士課程修了
平成5年4月	三菱電機中央研究所研究員
平成11年10月	北海道大学電子科学研究所講師
平成12年7月	博士(理学)(京都大学)
平成12年9月	北海道大学電子科学研究所助教授
平成19年6月	北海道大学電子科学研究所教授

功 績 等

量子力学の基本的な原理を活用することで、スーパーコンピューターによっても時間がかかりすぎて解けない問題を解く量子コンピューターが可能になると考えられています。竹内繁樹氏は、量子力学の原理を情報処理に応用する量子情報技術の一つとして、光子を用いた量子計算の方法と量子回路を初めて提案し、それを実現することに成功しました。その後、量子力学の基本概念である「量子もつれ合い」状態を、入力された2個の光子の偏光状態から抽出

する「もつれ合いフィルター」の機能を持つ光子量子回路の実現にも成功しました。

さらに、同氏は4個の光子のもつれ合い状態を利用することによって、古典理論による限界を超えた感度での位相測定に成功しました。

同氏の業績は、光子を用いた量子情報処理を実現するとともに、量子コンピューター、量子暗号通信および光測定の技術に革新をもたらすものであり、量子情報通信処理分野における研究の更なる発展が期待されます。

(電子科学研究所)

工学研究科 加賀屋教授と遺伝子病制御研究所 高田教授が平成 21 年度北海道科学技術賞を受賞

1月22日（金）、平成21年度北海道科学技術賞受賞者が発表され、工学研究科教授 加賀屋誠一氏と遺伝子病制御研究所教授 高田賢藏氏が選ばれました。

この賞は、科学技術上の優れた発明、研究等を行い、本道産業の振興、道民生活の向上など

経済社会の発展振興等に功績のあった者に北海道知事表彰として贈呈されるものです。

贈呈式は2月24日（水）に札幌市内で行われました。

各氏の受賞にあたっての功績等を紹介します。

○工学研究科・教授 加賀屋 誠一 氏

工学研究科 加賀屋誠一教授は、「北海道における持続可能な社会実現のための計画技術の開発と適用」の功績により、受賞されました。同氏の功績と略歴を紹介します。



略 歴 等

昭和45年 3 月	北海道大学工学部土木工学科卒業
昭和45年 4 月	北海道開発局土木試験所（現土木研究所寒地土木研究所） 研究員
昭和50年 4 月	北海道大学工学部助手
昭和58年 3 月	学術博士（北海道大学）
昭和59年 9 月	北海道大学大学院環境科学研究科助教授
平成 5 年 4 月	北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授
平成 7 年 4 月	北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成17年 4 月	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院工学研究科教授

功 績 等

同氏は、本道において持続可能な社会を構築するためには、戦略的な工学アプローチが必要であるとの視点から、安全安心で災害に強い社会の計画技術、環境にやさしい都市交通計画技術、さらに環境との共生による戦略的環境評価技術といった政策工学研究を進めてきました。

安全安心で災害に強い社会の計画技術では、水害などの自然災害に対し、地域的施策を含む総合的な減災システムが重要であり、ハード・ソフトを融合した多様な計画手法をシステム科学に基づき検討することを提案しました。

環境にやさしい都市交通計画技術では、都心部の機能と連携した新しい交通システムの構築と市民ニーズとの整合性の議論が必要であり、それらを総合的に把握できるシステムズアプローチによる新しい計画論をとりまとめました。

環境との共生による戦略的環境評価技術では、自然と社会の共生を基にした新しい環境システムを確立するために、欧米で議論されている戦略的環境評価手法に基づいた、政策決定プロセスと政策工学導入による実践的アプローチを提案しました。

これらの計画技術は、豊平川、新川洪水危機管理計画における議論や札幌都心交通計画など、社会基盤計画や地域計画、都市計画分野などにおいて生かされており、また、十勝川水系河川整備計画の現場においては、環境との共生による評価技術の実証的な適用を行い、複雑な問題解決を図ってきました。これらのことにより、道民生活の向上のみならず、本道の科学技術の発展に多大な貢献を果たしました。

（工学研究科・工学部）

○遺伝子病制御研究所・教授 高田 賢藏 氏

遺伝子病制御研究所 高田賢藏教授は、「EBウイルスの発がんメカニズムの研究と抗体医薬開発への応用」の功績により、受賞されました。同氏の功績と略歴を紹介します。



略 歴 等

昭和47年3月 北海道大学医学部卒業
 昭和55年3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)
 昭和55年4月 北海道大学医学部附属癌研究施設助手
 昭和59年4月 日本大学医学部講師
 平成3年6月 山口大学医学部教授
 平成7年10月 北海道大学医学部附属癌研究施設教授
 平成12年4月 北海道大学遺伝子病制御研究所教授
 平成14年4月 | 北海道大学遺伝子病制御研究所長
 平成18年3月 |
 平成15年3月 株式会社イーベック取締役
 平成16年7月 株式会社イーベック代表取締役会長

功 績 等

同氏は、永年、EBウイルスの研究に従事し、EBウイルス発がんモデルの確立、発がんの分子メカニズムの研究で優れた成果をあげてきました。

こうした基礎研究の成果を基に、平成15年1月に北海道大学発の創薬ベンチャーを起業するとともに、EBウイルスが抗体産生細胞であるBリンパ球の増殖を誘導する活性を利用して、ヒトリンパ球から高品質な抗体を作製する技術を開発しました。

さらに、開発した1種類の抗体について、平成20年9月に、日本のバイオベンチャーとしては初めて、欧米の大手製薬会社との大型ライセンス契約締結に成功しました。同氏が開発した技術は、欧米の特許に依存せず、マウスを用いる従来法よりはるかに高品質な抗体開発を可能とするものであり、今後の優れた医薬品開発へ

の応用が期待されます。

同氏が創設したベンチャー企業は、既に14名の従業員を採用し、優秀な女性人材の活用にも成功するなど、道内の雇用情勢の改善に貢献してきました。また、このベンチャー企業は、抗体医薬開発の内、抗体作製に特化していますが、関連する企業の裾野は極めて広いことから、地域産業に与える効果は大きいと考えられます。

こうした大学発ベンチャー企業の活躍は、生命科学の基礎研究に従事する学生や若手研究者など将来の担い手に大きな夢を与えるとともに、大学と地域企業との連携を一層活発化させるなど、本道産業の振興に寄与し、道民生活の向上のみならず本道の科学技術の発展に多大な貢献を果たしました。

(遺伝子病制御研究所)

農学部本館が BELCA 賞ロングライフ部門を受賞

第19回BELCA賞が2月5日（金）に公表され、農学部本館がロングライフ部門を受賞しました。

BELCAとは社団法人建築・設備維持保全推進協会の略称で、BELCA賞のロングライフ部門とは、適切な設計のもとに建設され、長年にわたり継続的に維持保全を実施した、特に優秀な建築物で、建築後30年以上を経過している建

築物に与えられる荣誉です。

農学部本館はPFI事業の改修工事が平成20年9月末に終了し、今回の受賞となりました。表彰式は、5月19日（水）にロイヤルパークホテル（東京都中央区）にて開催され、ロングライフ部門の受賞対象者は建物所有者、設計者、施工者及び維持管理者となります。



農学部本館



ブロンズ製賞牌

(施設部)

医学研究科 白土教授に最先端研究開発支援プログラム配分額決定

3月9日(火)、総合科学技術会議(議長・鳩山由紀夫首相)は「最先端研究開発支援プログラム」について、各研究者に配る金額を発表し、本学医学研究科の白土博樹教授に36億円の研究費が配分されることが決定しました。

最先端研究開発支援プログラムは、全国から

565件(うち大学関係は428件)の応募があり、平成21年9月に本学の白土教授が提案した研究課題を含む30件の研究課題が決定した後、各研究課題に対する研究費総額の査定が行われていました。

研究課題名：持続的発展を見据えた「分子追跡放射線治療装置」の開発
中心研究者：医学研究科 教授 白土博樹

「最先端研究開発支援プログラム」は、新たな知を創造する基礎研究から出口を見据えた研究開発まで、さまざまな分野及びステージを対象とした、3～5年で世界のトップを目指した先端的研究を推進することにより、産業、安全

保障等の分野における我が国の中長期的な国際的競争力、底力の強化を図るとともに、研究開発成果の国民及び社会への確かな還元を図ることを目的とした、「研究者最優先」の研究支援制度として創設されたものです。

(学術国際部研究協力課)

平成21年度知的財産セミナーを開催

平成21年度の知的財産セミナーを、3月3日(水)、本学創成科学研究棟大会議室にて開催しました。講師は産学連携本部の産学連携マネージャー等が担当し、約50名の参加者に、本学における知財の取扱い、特許出願の手続き、研究サンプルの取扱い、企業との連携、契約交渉における主要な論点等について、6時間にわたり説明を行いました。

本セミナーの開催にあたり、道内他大学の関係者に参加を呼びかけたところ他大学等から15名の方々が参加し、例年以上に質問も多く、熱心な意見交換が行われました。

本年度のセミナーは、これまで本学が開催していた講義内容に基づき、他大学へ提供しましたが、道内他大学等の知的財産担当者・事務レ

ベルにおいても連携協力を図っていくことが期待されていることから、来年度以降は人材育成の一環としての知的財産関連研修等の内容についても、他大学関係者と協議のうえ検討していきたいと考えております。



(産学連携本部)

北海道大学一般入試第2次入学試験（前期日程・後期日程） 及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表

平成22年度一般入試第2次入学試験前期日程試験は2月25日(木)に、後期日程試験は3月12日(金)に実施しました。また、私費外国人留

学生入試第2次選考は2月19日(金)に実施しました。

各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1 前期日程

志願者は5,428名で、2段階選抜を実施しなかったため全員が受験対象者となり、受験者は5,297名でした。

合格者は2,034名で、合格発表は、3月6日(土)午前9時に高等教育機能開発総合センター正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、午前9時30分頃に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が1,059名で全体の52.1%。卒業年度別では、平成22年3月高等学校卒業者が1,248名で全体の61.4%。また、男女別では女子が557名で全体の27.4%でした。

2 後期日程

志願者は4,235名で、2段階選抜の第1段階選抜を行った結果、教育学部で不合格者が2名、医学部医学系で不合格者が47名、獣医学部で不合格者が36名あり、その他の学部では志願者全員が合格し、受験対象者は4,150名で、受験者は1,982名でした。

合格者は544名で、合格発表は、3月20日(土)午前9時に高等教育機能開発総合センター正面玄関に合格者の受験番号を掲示するとともに、午前9時30分頃に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が179名で全体の32.9%。卒業年度別では平成22年3月高等学校卒業者が345名で全体の63.4%。また、男女別では女子が135名で全体の24.8%でした。

3 私費外国人留学生入試

私費外国人留学生入試の志願者は81名で、第1次選考の合格者は47名、第2次選考の受験者は33名、合格者は27名でした。

平成22年度一般入試第2次入学試験(前期日程)合格者数等一覧

学部・系・群・専攻		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
文	学 部	148	456 (234)	3 (1)	453 (233)	3.1	163 (82)	
教	育 学 部	43	124 (59)	1 (0)	123 (59)	2.9	42 (18)	
法	学 部	160	404 (130)	5 (2)	399 (128)	2.5	175 (60)	
経	済 学 部	160	549 (136)	10 (1)	539 (135)	3.4	179 (46)	
理	数 学 重 点 選 拔 群	34	79 (15)	2 (0)	77 (15)	2.3	33 (7)	
	物 理 重 点 選 拔 群	64	150 (19)	3 (0)	147 (19)	2.3	66 (7)	
	化 学 重 点 選 拔 群	64	173 (49)	5 (1)	168 (48)	2.6	72 (15)	
	生 物・地学重点選抜群	47	127 (45)	2 (1)	125 (44)	2.7	51 (18)	
医	医 学 系	92	332 (75)	20 (1)	312 (74)	3.4	92 (13)	
	保 健 学 系	看 護 学 専 攻	56	139 (117)	7 (5)	132 (112)	2.4	59 (44)
		放 射 線 技 術 科 学 専 攻	30	93 (29)	2 (1)	91 (28)	3.0	33 (11)
		検 査 技 術 科 学 専 攻	30	83 (60)	2 (0)	81 (60)	2.7	32 (21)
		理 学 療 法 学 専 攻	14	45 (18)	0 (0)	45 (18)	3.2	16 (8)
		作 業 療 法 学 専 攻	14	41 (25)	3 (1)	38 (24)	2.7	16 (9)
歯	学 部	35	143 (51)	5 (3)	138 (48)	3.9	39 (14)	
薬	学 部	50	129 (57)	8 (5)	121 (52)	2.4	57 (18)	
工	応 用 理 工 系	119	291 (43)	11 (2)	280 (41)	2.4	121 (15)	
	情 報 エ レ ク ト ロ ニ ッ ク ス 系	150	391 (25)	7 (1)	384 (24)	2.6	151 (6)	
	機 械 知 能 工 学 系	100	243 (11)	5 (0)	238 (11)	2.4	100 (4)	
	環 境 社 会 工 学 系	174	475 (79)	7 (1)	468 (78)	2.7	174 (28)	
農	学 部	159	336 (119)	11 (3)	325 (116)	2.0	171 (54)	
獣	医 学 部	20	120 (63)	2 (0)	118 (63)	5.9	20 (9)	
水	産 学 部	164	505 (147)	10 (3)	495 (144)	3.0	172 (50)	
計		1,927	5,428 (1,606)	131 (32)	5,297 (1,574)	2.7	2,034 (557)	

※ () 内の数字は女子で内数

平成22年度一般入試第2次入学試験(後期日程)合格者数等一覧

学部・系・群・専攻		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
文	学 部	37	335 (164)	165 (80)	170 (84)	4.6	40 (16)	
教	育 学 部	5	107 (46)	46 (16)	61 (30)	12.2	6 (6)	
法	学 部	40	398 (116)	214 (65)	184 (51)	4.6	44 (10)	
経	済 学 部	20	196 (42)	94 (19)	102 (23)	5.1	25 (5)	
理	数 学 重 点 選 拔 群	13	128 (18)	71 (8)	57 (10)	4.4	17 (3)	
	物 理 重 点 選 拔 群	17	120 (12)	65 (6)	55 (6)	3.2	18 (1)	
	化 学 重 点 選 拔 群	17	148 (27)	77 (9)	71 (18)	4.2	18 (2)	
	生 物 重 点 選 拔 群	14	177 (74)	77 (33)	100 (41)	7.1	18 (6)	
医	医 学 系	15	165 (39)	89 (16)	76 (23)	5.1	15 (4)	
	保 健 学 系	看 護 学 専 攻	14	107 (94)	61 (55)	46 (39)	3.3	16 (14)
		放 射 線 技 術 科 学 専 攻	7	33 (12)	19 (8)	14 (4)	2.0	8 (2)
		検 査 技 術 科 学 専 攻	7	60 (46)	35 (27)	25 (19)	3.6	8 (7)
		理 学 療 法 学 専 攻	4	29 (13)	17 (8)	12 (5)	3.0	4 (1)
		作 業 療 法 学 専 攻	4	32 (22)	13 (10)	19 (12)	4.8	4 (3)
歯	学 部	15	85 (30)	43 (13)	42 (17)	2.8	17 (8)	
薬	学 部	20	178 (55)	95 (23)	83 (32)	4.2	22 (6)	
工	応 用 理 工 系	30	276 (29)	166 (12)	110 (17)	3.7	43 (5)	
	情 報 エ レ ク ト ロ ニ ッ ク ス 系	30	249 (7)	152 (4)	97 (3)	3.2	40 (0)	
	機 械 知 能 工 学 系	20	201 (8)	116 (7)	85 (1)	4.3	23 (0)	
	環 境 社 会 工 学 系	36	364 (59)	188 (28)	176 (31)	4.9	45 (8)	
農	学 部	45	349 (89)	190 (46)	159 (43)	3.5	50 (7)	
獣	医 学 部	20	120 (47)	33 (8)	87 (39)	4.4	22 (11)	
水	産 学 部	35	293 (86)	142 (41)	151 (45)	4.3	41 (10)	
計		465	4,150 (1,135)	2,168 (542)	1,982 (593)	4.3	544 (135)	

※ () 内の数字は女子で内数

平成22年度私費外国人留学生入試合格者数等一覧

【学部・学科等】

学部・学科等		志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	合格者数	
文学部	人文学科	17 (10)	5 (4)	1 (1)	1 (1)	
教育学部	教育学科	6 (6)	6 (6)	5 (5)	4 (4)	
法学部	法学課程	6 (3)	5 (2)	3 (1)	2 (1)	
経済学部	経済学科	3 (2)	1 (1)	1 (1)	0	
	経営学科	7 (3)	2 (0)	1	1	
理学部	数学科	2 (2)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	
	物理学科	2	2	1	1	
	化学科	1	1	1	1	
	生物科学科 (生物学)	1	1	1	1	
歯学部	歯学科	1	1	1	0	
薬学部	薬学科	1 (1)	1 (1)	0		
	薬学	2 (1)	0			
工学部	応用理工系学科	(応用物理工学)	1	1	1	1
		(応用化学)	6 (3)	4 (3)	3 (3)	3 (3)
		(応用マテリアル工学)	1	1	1	1
	情報エレクトロニクス学科	(情報工学)	1	1	0	
		(コンピュータサイエンス)	1	0		
		(電子情報)	3	3	2	1
	機械知能工学科	(機械情報)	3 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
		(機械システム)	7	1	1	1
	環境社会工学科	(シビルエンジニアリング)	1	1	1	1
		(国土政策学)	1	1	1	1
		(衛生環境工学)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	2 (2)
(資源循環システム)		2 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	
農学部	生物資源科学科	1	1	1	1	
	応用生命科学科	2 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	
計		81 (36)	47 (24)	33 (18)	27 (15)	

※ () 内の数字は女子で内数

【国・地域別】

国・地域	志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	合格者数
韓国	33 (14)	20 (10)	12 (6)	9 (4)
中国	47 (21)	26 (13)	20 (11)	17 (10)
台湾	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)
計	81 (36)	47 (24)	33 (18)	27 (15)

※ () 内の数字は女子で内数

(学務部入試課)

ドイツ・ブレーメン大学と大学間交流協定を締結

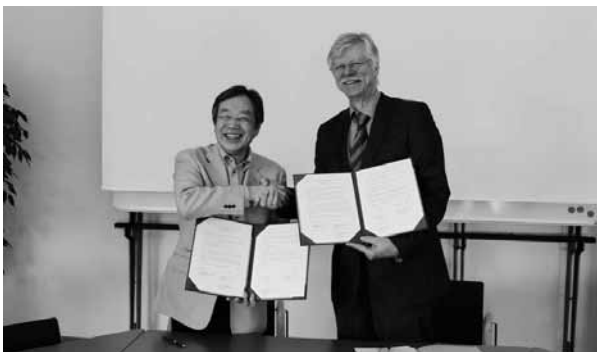
2月11日(木), ドイツ・ブレーメン大学との学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書の調印が行われました。調印式は同大学で開催され, 本学からは本堂副学長, 福井低温科学研究所教授ら4人が出席しました。

ブレーメン大学は1971年に設立された総合大学です。物理学・電気工学, 生物学・化学, 地球科学, 経済学, 法学等12の学科を有し, 学生数は1万9千人余り, うち留学生は約3千人を数えます。本学では, 低温科学研究所が2009年

3月にブレーメン大学生物学・化学科と部局間交流協定を締結して交流を深めてきました。

これまでの交流実績を踏まえ, 全学的な交流を推進していくために, このたび低温科学研究所が責任部局となり, 環境科学院及び理学研究院を関係部局として, ブレーメン大学との大学間交流協定が締結されました。今後, 両大学の交流がさらに活発になることが期待されます。

なお, 本協定の締結により, 本学の大学間交流協定数は77となりました。



協定書を手に握手する本堂副学長と Müller 学長



調印式後の記念撮影

(学術国際部国際企画課)

JICA本部に提言書を提出:「水・衛生分野における国際協力に関する提言」

去る2月18日(木),工学研究科の船水尚行教授がJICA本部を訪問し,地球環境部長の中川聞夫氏へ「水・衛生分野における国際協力に関する提言」を提出しました。

これは,2005年以来「持続可能な開発」国際戦略本部事業において推進してきた「水の統合的管理」に係る研究成果,ならびに昨年12月11日(金)に開催した「北海道大学-JICA共同シンポジウム『安全な水を世界の人々に届ける

ための国際協力のあり方~日本の水技術を活用する方策』」の成果として,船水教授とメディア・コミュニケーション研究院の鍋島孝子准教授が中心となってまとめたものです。

提言書ではJICAに対し,国連ミレニアム開発目標の達成に向けて,現行の水システムの限界と課題を踏まえた上で,水と衛生分野における国際協力事業を実施する際には,次の5つの観点を重視するよう提案がなされています。

(1) ローカルな視点を探り,活用する

現地の文化や伝統,社会システムに適合した水施設の維持管理の仕組みを確立し,この水管理の仕組みに合った技術を開発し,日常化させる。

(2) 基本的人権や地球の将来像といったグローバル価値観を共有する

水分野の国際協力は,グローバルな価値観と将来目標を共有するところから出発しなければならない。

(3) 長期的な視野にたった施策を立案する

経済成長にあわせてソフト,ハードともスムーズに水システムを進化させていくために,将来を見据えた仕組み作りが必要である。

(4) 現場情報の集積と多層的な人材育成を行う

これまでの水分野の国際協力について成功例と失敗例を整理し,知識ベースの構築をはかると共に,多層的な人材の育成が必要である。

(5) 開発の新しいアプローチを確立する

国境を越えたアクターの連携によってプロジェクトが自律的に発展できる環境条件を整える必要がある。

提言の全文は,以下のウェブサイトからダウンロードが可能です。

<http://www.sustain.hokudai.ac.jp/>

提言作成の関係者

■コアメンバー

- ・船水 尚行,北海道大学大学院工学研究科教授
- ・鍋島 孝子,北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
- ・箱山 富美子,藤女子大学人間生活学部教授
- ・橋本 和司,八千代エンジニアリング(株)国際事業本部顧問
- ・Neni Sintawardani,インドネシア科学院(LIPI)研究員



JICA本部に提言書を提出する船水教授

(工学研究科,「持続可能な開発」国際戦略本部)

第5回「北大・九大合同フロンティア・セミナー」開催

2月24日(水)、東京都千代田区丸の内での東京ステーションコンファレンスにおいて、第5回「北大・九大合同フロンティア・セミナー」を、「縄文と弥生」をテーマに開催しました。

当日は、首都圏の企業や官庁などで活躍している両大学のOBやOGの皆様をはじめとして、約130名の方々に参加いただきました。



講演中の石森特任教授

最初に登壇した本学の石森秀三特任教授(観光学高等研究センター長)は、「縄文文化と現代日本」と題し、日本文明の基底をなす縄文文化との比較をとおして、現代日本におけるライフスタイル・イノベーションのあり方等について講演されました。

次に、九州大学の宮本一夫教授が登壇され、「縄文文化 VS 弥生文化－農耕社会の成立という観点から－」と題して、狩猟採集を主とする縄文社会から農耕を主体とする弥生社会への移行等について講演されました。



講演会会場風景

パネルディスカッションでは、本学の佐藤誠特任教授(観光学高等研究センター)がコーディネーターとなり、講演を行った本学石森特任教授及び九州大学宮本教授がコメントーターとなって、講演された内容に対する質問に両講師が応える形で進められました。



パネルディスカッション風景

今回のセミナーも、前回同様有料で開催し、休憩中に軽食、オードブルやビール等を提供しました。休憩後のパネルディスカッションでは、両先生方の、知的興奮を誘った講演内容に出席者からの質問も活発になり、終了後も講演者が対応する一幕もあり、盛会裏に終了しました。

なお、次回の第6回「九大・北大合同フロンティア・セミナー」は、平成22年6月10日(木)18時30分から、今回と同じく東京ステーションコンファレンスにて「最先端研究開発支援プログラムの推進(仮題)」をテーマに開催いたします。詳細が決まりましたら本学ホームページ等で改めてご紹介いたしますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(学術国際部研究協力課)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動をするとしています。平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北大フロンティア基金情報】

基金累計額 (2月28日現在)

9,102件 1,460,971,251円

教職員の寄附率 23.5% (910件/3,874人)

<2月のご寄附状況>

法人等12社、個人88名の方々から92,010,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名

(法人等)

株式会社アークス、社会福祉法人函館共愛会 共愛会病院、総合病院 釧路赤十字病院、医療法人徳洲会 札幌東徳洲会病院、株式会社ニトリ、株式会社北洋銀行、北海道大学生協同組合、北海道中央労災病院

(個人)

安藤 淳、遠藤 光晴、岡田 尚武、奥田 安弘、加藤五十六、熊本 信夫、倉田 吉喜、
 劔物 弘子、小出 精、斉藤 恵子、須賀 雄一、高森 スミ、田中 慎一、土橋 宣昭、
 中川 迪夫、山崎 秀樹、山城 明伸、油井 俊

銘板の掲示(20万円以上のご寄附)

(個人)

加藤五十六, 劔物 弘子

(法人等)

株式会社ニトリ

感謝状の贈呈



劔物 修様(3月10日)



株式会社ニトリ様(3月18日)

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ

教職員向け

学内限定情報・システム

北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/gakunai/fund.pdf>

② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ ———— 基金事務室(事務局1階・学内電話2012/2017)

(基金事務室)

(財)北海道大学クラーク記念財団への寄附

このたび、財団法人北海道大学クラーク記念財団から、出村克彦名誉教授から10万円のご寄附を賜った旨ご報告がありましたので、謹んでお知らせいたします。

同財団につきましては、毎年、本学の教育・研究及び学生支援のため、多額の助成事業を実

施していただいております、本学といたしまして、このたびのご厚志に対しあらためて感謝を申し上げます。

なお、ご芳名の掲載につきましては、ご本人の同意を得ておりますことを申し添えさせていただきます。

(総務部総務課)

ICT活用教育セミナーを開催

近年「ICT」（注1）と呼ばれる情報コミュニケーション技術の発達や高等教育の国際化の進展はめざましく、これに伴い、欧米諸国をはじめ韓国やシンガポール等のアジアでもeラーニング（注2）のICTを活用した教育の導入や普及が進んでいます。

これを受けて、2月4日（木）に、今年から放送大学と本学の共催による「ICT活用教育セミナー」を本学学術交流会館第1会議室において、開催いたしました。

放送大学から2名の講師を招き、eラーニングの活用方法やICT活用教育の効果について、講演いただきました。また、本学3名の教員からは、北海道大学における事例紹介を発表いただきました。

これらは、今後、ICT活用教育の導入や推進を予定している大学や高専等の教職員に対して、最近のICT活用教育の動向や効果的な授業設計の状況やeラーニングの活用方法や活用事例や本学において実施しているICTを活用した教育事例を紹介し、役立ててもらうことを目的としています。

セミナー当日は、本学の教員、事務職員及び大学院生の他、道内国公私立大学からの参加者をあわせた、44名の方にご参加いただきました。

質疑応答も含めて3時間40分にわたるセミナーには、参加者の皆さんは熱心に耳を傾け、盛況のうちに終了することができました。

< 講演者一覧 >

- 仲林 清（放送大学 ICT活用・遠隔教育センター 教授）
- 内田 実（放送大学 ICT活用・遠隔教育センター 特定特任教授）
- 伊藤 直哉（北海道大学 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授）
- 布施 泉（北海道大学 情報基盤センター 准教授）
- 山田 邦雅（北海道大学 高等教育機能開発総合センター 特任准教授）

（注1）「ICT（Information and Communication Technology）」... 情報コミュニケーション技術のこと

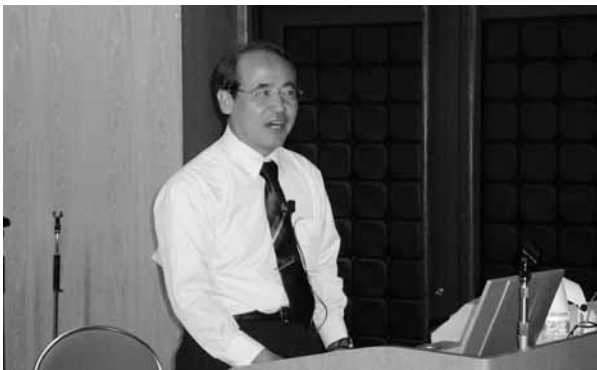
（注2）「eラーニング」... 情報コミュニケーション技術を用いて行う学習のこと



開講挨拶をする林理事・副学長



講演する放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター
仲林教授



講演する放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター
内田特定特任教授



講演するメディア・コミュニケーション研究院
伊藤准教授



講演する情報基盤センター 布施准教授



講演する高等教育機能開発総合センター
山田特任准教授



セミナーの様子

(学務部教務課)

平成21年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催

平成21年4月以降に入学した留学生の歓迎と本年3月に勉学や研究を終えて帰国する留学生の祝賀を兼ねた総長主催の懇談会が、2月12日（金）に京王プラザホテル札幌において開催されました。

当日は、留学生や指導教員をはじめ、在札幌外国公館や留学生支援団体の方々、各部局長、留学生関係委員会委員の先生方など、約400名の出席がありました。

懇談会は佐伯総長の挨拶で始まり、ついで、来賓を代表して駐札幌中華人民共和国総領事館の胡勝才総領事よりお祝いのご挨拶をいただきました。

その後、入学生を代表して、キルギス出身のマトカディーロア・アリビーナさん（日本語・日本文化研修生）と、帰国留学生を代表して韓国出身の李炯直（イ・ヒョンジク）さん（経済学研究科）より、それぞれ日本語でお話がありました。

上田農学研究院長の乾杯の音頭で懇談に移り、参加者は終始和やかなムードで楽しいひと時をすごしました。留学生との有意義な交流の機会にもなりました。

最後に林副理事・学術国際部長からの励ましの言葉と締め乾杯で懇談会は盛況のうちに終了しました。



総長挨拶



会場の様子



帰国留学生代表スピーチ



新入生代表スピーチ

（学術国際部留学交流課）

留学生センター日本語研修コース修了 (2009年10月入学者)

留学生センター日本語研修コース研修生の修了式が2月12日(金)16時よりクラーク会館で行われました。

この研修コースは、主に大使館推薦の国費外国人留学生のうち、修了後に本学大学院又は道内の他大学大学院に進む研究留学生や北海道教育大学へ進む教員研修生、また、本学工学部に入学する日韓共同理工系学部留学生等に日本語予備教育を行うためのもので、留学生センターにおいて6ヶ月間開設されています。

今回修了式を迎えたのは、昨年10月に入学した国費外国人留学生10名、日韓共同理工系学部

留学生6名に加え、学内公募により集中日本語コースとして受講した15名の計31名です。

修了式では、来賓や指導教員の方々が見守る中、日本語研修コース研修生には修了証書が、集中日本語コース受講者には履修証明書が、佐伯総長より一人一人に授与されました。引き続き総長から、祝辞と今後の飛躍を祈念する激励のことばが述べられ、修了者は真剣な面持ちで聞き入っていました。

最後に記念写真を撮り終了しましたが、その後もしばらく留学生同士、指導教員との写真撮影や懇談が続いていました。



総長挨拶



集合写真



修了証書を受け取る学生



(留学生センター)

部局ニュース

工学研究科がブルキナファソ国際水環境技術学院と部局間交流協定を締結

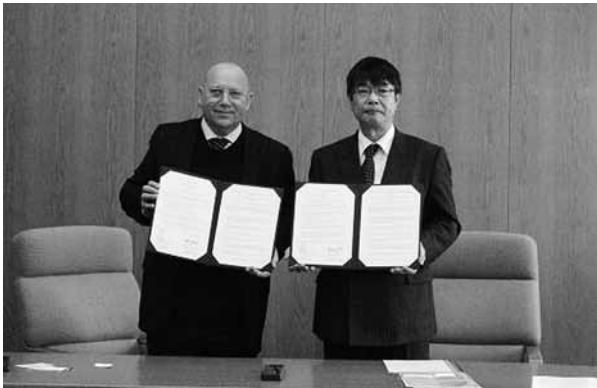
工学研究科では、1月26日（火）にブルキナファソ国際水環境技術学院との部局間交流協定及び学生交流に関する覚書を締結しました。

この協定の締結は、ブルキナファソ国際水環境技術学院General Managerが来訪し、工学研究科長との間で調印されたものです。

ブルキナファソ国際水環境技術学院は1968年設立のEIERと1970年設立のETSHERとの合併によりアフリカ14カ国によってブルキナファソの首都ワガドゥグに設立し、115人の教育者及

び100人の事務職員等で構成されています。

当該協定に先駆けて、途上国であるブルキナファソの水環境整備のため本研究科教員が支援プロジェクトにより研究協力を進めていましたが、国際水環境技術学院と協定を結ぶことにより、国際的な支援活動の後押しとなり、また、研究及び学生交流を含めた積極的且つ充実した実績を積むことが期待されます。



調印式の様子



調印後の記念撮影

(工学研究科・工学部)

農学研究院が弘前大学北日本新エネルギー研究センターとの連携協定を締結

農学研究院と弘前大学北日本新エネルギー研究センターは、共同研究等の研究協力、研究施設・設備の相互利用、人材交流、人材育成、研究・技術等に関する情報の交換などに協力して取り組むため、2月3日(水)に、同センターにおいて連携協定を締結しました。

同センターは、現代における深刻なエネルギー問題に対処する研究を進展させるとともに、この研究に基づき、エネルギー高度利用やエネルギー関連の先進的プロジェクト及び人材育成の具体化を図ることにより、地域再生の基盤となる持続型社会を構築することを目的として、平成21年3月に設置されました。

その設置目的と、本学松田従三名誉教授が中心となって推進しているバイオマス系廃棄物の処理と乾式メタン発酵技術とを中心とするバイオマスエネルギーの研究とが合致し、このたびの連携協定の締結となりました。

連携協定式上、上田一郎農学研究院長は、「北海道大学農学研究院の今日的な課題とし

て、食料の安定供給、低炭素社会の実現に向けて何ができるか、といったことがあげられ、循環農業をどうやって北海道に実現するかが、重要な課題である。その中で、バイオマスプラントを循環農業の中のエネルギー源に位置づけていくことが非常に大事となっている。今回の協定によりその方面での北日本の仲間ができて嬉しい。」と述べました。



協定書調印後、握手する加藤陽冶弘前大学副学長(右)と上田農学研究院長

(農学院・農学研究院・農学部)

触媒化学研究センターが英国カーディフ大学 カーディフ触媒研究所と友好学術交流協定を締結

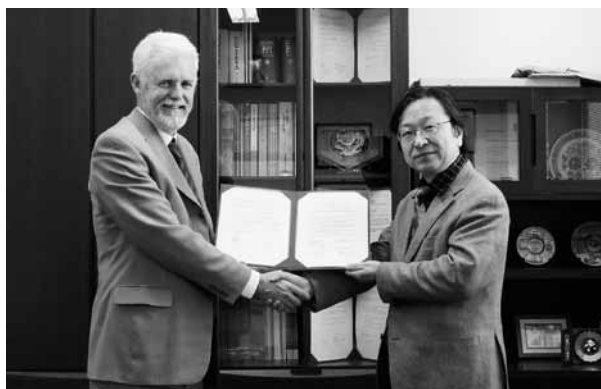
触媒化学研究センターは、本年2月17日（水）に英国カーディフ大学カーディフ触媒研究所と友好学術交流協定を締結しました。

カーディフ大学は、英国ウェールズ地方の首都で、歴史あるカーディフ市にある大学です。1883年創立で、学生数27,000人、教員等6,000人を有し、緑の多い静かな市内の中心に位置する大学で、研究と教育を活発に進めている総合大学として、世界をリードする活動を展開しています。中でも最近スタートしたカーディフ触媒研究所は、大学の支援を全面的に受けて、豊富な陣容と研究設備を整え、英国の触媒研究の中心的役割を担おうとしています。カーディフ触媒研究所は、固体触媒から生体触媒まで幅広い展開をしており、最近では触媒企業で長く勤めた研究者を副所長に登用し、様々な共同研究を展開するべく、活動を活発化させています。これまで、英国での触媒研究は各大学での個別分散的な組織ないしは研究者によって進められることが多く、また、表面科学などの学術的な色彩の強い研究が主となっていましたが、最近の資源・エネルギー問題を背景に、より実用的な触媒の重要性が認識されるようになり、カーディフ触媒研究所のような組織が生まれまし

た。この傾向は世界的な潮流でもあります。

世界で最初の本格的な触媒研究機関である触媒研究所を源流とする本センターは、世界的な触媒・表面科学の研究の拠点であり、また、持続可能な社会の構築に向けた触媒化学の発展を推進する機関として活動することが国際的に求められています。そのような中、本センターは、数年前から世界的触媒研究のネットワーク形成を進めており、その一環として、2008年にはカーディフ触媒研究所を含めた世界8カ国の触媒研究機関が参画した「触媒サミット」を北大で開催しました。本センターはこの「触媒サミット」を契機とし、また触媒化学研究を国際的連携でさらに発展させようとの合意の下に、今回カーディフ触媒研究所と部局間協定を締結することとし、過日、本センターが企画するプロジェクトに参加するために本センターを訪れた同研究所のM. Bowker教授の出席のもと、締結式を執り行いました。

カーディフ触媒研究所と本センターとは研究の特徴もよく似ていることから、様々な面で協力的に研究展開できるものと大いに期待されます。



M. Bowker 教授と上田センター長との締結式



カーディフ触媒研究所がある大学本部

(触媒化学研究センター)

北海道大学病院 がん診療連携拠点病院主催事業「高度ながん早期診断法に関する研修会・合同カンファレンス」を開催

北海道大学病院では、2月5日(金)に本学学術交流会館で、がん診療に携わる医師やコメディカルスタッフを対象に、「高度ながん早期診断法に関する研修会・合同カンファレンス」を開催しました。

がん診療連携拠点病院は、2次医療圏(石狩支庁管内)において、がん診療に携わる医師を対象とした早期診断に関する研修を実施すること及び診療連携を行なっている地域の医療機関等の医療従事者も参加する合同のカンファレンスを毎年定期的実施することを義務付けられています。

また特定機能病院である本院は、それに加えて北海道内のがん診療連携拠点病院等の医師等に対し、高度のがん医療に関する研修を実施することとされています。

当日は、浅香正博病院長の挨拶に始まり、本院の加藤元嗣光学医療診療部長による「早期胃癌の診療-NBI拡大内視鏡診断から予防まで」と題した講演が行われ、大学病院ならではの

の高い専門性を持つがん早期診断法が紹介されました。

続いて、本院腫瘍センターの小松嘉人化学療法部長の進行により、研修参加者との合同カンファレンスが行われ、講演の内容に関連した内視鏡診療における話題が、講師である加藤部長から提供されました。また、参加者からも、自らの専門分野について、その治療法を簡単に紹介し、内視鏡治療との関連を問う発言がある等、大変な盛り上がりを見せました。

最後に、福田諭副病院長・腫瘍センター長から、研修会参加者に対して修了証書が授与されました。

本企画は、全道のがん診療連携拠点病院やその他の医療機関から、がん診療に携わる医師やコメディカルスタッフが参加するという大きなものですが、がん診療連携拠点病院指定2年目となる平成22年度も、同規模の研修会・合同カンファレンスを企画する予定です。



浅香病院長の開会挨拶



特別講演を行う加藤光学医療診療部長



合同カンファレンスの小松化学療法部長(右)と加藤光学医療診療部長(左)



修了証書を授与する福田副病院長・腫瘍センター長

(北海道大学病院)

駐日米国大使ジョン・ルース氏とディスカッション

2月4日（木），在札幌米国総領事館からの案内により，札幌国際プラザで経済学研究科・経済学部学生有志が，駐日米国大使ジョン・ルース氏と1時間半にわたりディスカッションを行いました。

まず，ルース大使から，ご自身の歩みやオバマ大統領との出会いから選挙支援への道のり，ご家族のことなど紹介がありました。その後の質疑応答では，学生から普天間基地の問題をはじめ，日米関係についての鋭い質問がなされました。ディスカッションの話題は，アジアの政

治・経済や日本の若者のアメリカ感など多岐に及び，ルース大使は学生の質問に，ひとつひとつ誠実に応えてくださいました。

留学経験者あるいは，留学予定者の学生を中心とするメンバー構成でしたが，大使からは「是非とも海外へ出て，グローバルな視点を養い，今後の日米関係を新たに構築していきましょう」と激励を受けました。短い時間でしたが，参加者全員が有意義な時間を共有することができました。



駐日米国大使ジョン・ルース氏と学生によるディスカッションの様子

（経済学研究科・経済学部）

国際会計基準審議会 (IASB) 理事の講演会を開催

経済学研究科会計情報専攻（会計専門職大学院）では、2月26日（金）に、社団法人日本内部監査協会、日本公認会計士協会北海道会ならびに札幌証券取引所との共催で、国際会計基準審議会（IASB）の理事である山田辰己氏を講師に招き、講演会を開催しました。

山田氏は、「IFRS（国際財務報告基準）の設定の現状－米国会計基準とのコンバージェンスにも触れて－」という演題で講演されました。IFRSは国際的な会計基準の統一を図るためにIASBによって設定された基準で、2010年3月期決算からわが国でも任意適用が認められます。さらに、金融庁の方針として、2015年にもすべての上場会社に適用が義務づけられる可能性があり、経済界では高い関心が寄せられて

いるテーマです。また、会計監査を行う公認会計士や会計制度の研究者もその動向に注意を払っています。

こうした状況を反映して、週末の夕方開催にもかかわらず、道外からの参加者を含め、150名を超える経理・監査担当者、公認会計士、さらには会計研究者や会計学を学ぶ学生が参加し、山田氏によるIFRSの動向に関する説明に熱心に聞き入っていました。

会計専門職大学院では、日本公認会計士協会北海道会などと協力して、今後もIFRSの動向や詳しい実務対応などに関する講演会、セミナーなどを開催することで、北海道地域の企業におけるIFRSへの対応に役立つ情報の提供を行っていきたいと考えています。



国際会計基準審議会 (IASB) 理事山田氏



参加者の様子

(経済学研究科・経済学部)

公認会計士・監査審査会会長の特別セミナーを 開催

経済学研究科会計専門職大学院では、3月1日（月）に、日本公認会計士協会北海道会との共催で、公認会計士・監査審査会会長の金子晃氏を講師に招き、特別セミナーを開催しました。

公認会計士・監査審査会は、平成16年4月に金融庁に設置された機関であり、公認会計士試験の実施のほか、監査法人及び公認会計士が行う監査の品質についての審査及び検査などの業務を所掌しています。金子会長は、「監査の品質の向上を目指して」というテーマで、監査の

品質を巡る国際的な議論の状況や、主要国の監査監督機関における最近の取り組みの状況などについて、分かりやすく講演されました。また、セミナーの後半において、同審査会の事務局担当官から、「監査法人に対する検査指摘事例」の紹介が行われました。

当日は、道内の公認会計士や学生など、約80名が参加し、たいへん盛況でした。

会計専門職大学院では、日本公認会計士協会北海道会などと協力して、今後もこのようなセミナーを開催していきたいと考えています。



公認会計士・監査審査会会長 金子氏



特別セミナーの様子

（経済学研究科・経済学部）

「おしよろ丸就航100周年記念事業」写真パネル展の第6回巡回展を開催

水産学部では、おしよろ丸就航100周年記念事業のひとつとして、平成21年9月から巡回展形式による「おしよろ丸就航100周年記念写真パネル展」を実施してきましたが、最終回となる第6回目を平成22年2月22日(月)から3月11日(木)までの期間で札幌キャンパス・ファカルティハウス"エンレイソウ"1階ギャラリーにて開催しました。

この写真パネル展では、初代「忍路丸」から現在の四世までの雄姿や船上での実習風景な

ど、四代にわたるおしよろ丸の歴史を辿ることができる計37点の写真作品を展示しました。

"エンレイソウ"は、札幌キャンパスのほぼ中央に位置し、レストランも併設されていることから、本学関係者のみならず、来学された他大学等の研究者など多くの方に観ていただいたことで、北海道大学の、そして水産学部の附属練習船である「おしよろ丸」の存在を広く知らしめた絶好の機会となりました。



ホール入り口の風景



展示風景 1 (初代, 二世)



展示風景 2 (二世, 三世)



展示風景 3 (四世)

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

附属図書館で「北大生の学生群像（第Ⅱ期）」展を開催

2月16日（火）から、附属図書館正面玄関ロビーにおいて、附属図書館・大学文書館共催企画展示「北大生の学生群像（第Ⅱ期）」をスタートしました。

今回は、「札幌農学校生の学生生活（2）－札幌農学校で世界が会うとき－」と題し、札幌農学校後期にあたる1900（明治33）年～1907（明治40）年に在学した第19～24期生を中心に、学生生活にまつわる資料と学生自身の回想を展示しています。展示品は、いずれも附属図書館、大学文書館が所蔵する図書や資料です。

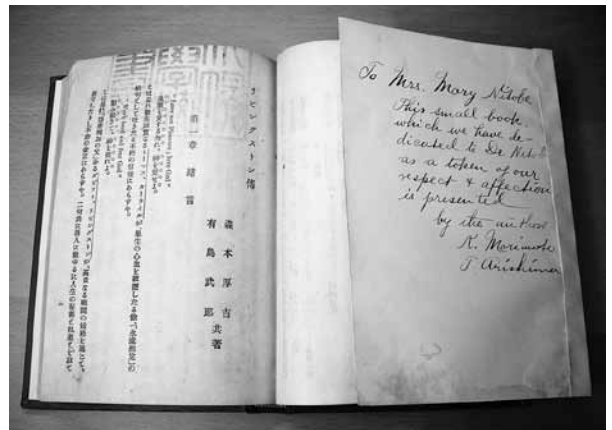
この時期の札幌農学校は、初期の卒業生が教授陣の主力を担って、独自の校風を築いていきました。全国各地から学生が入学し、アジア地域から留学生もやって来ました。さらに、第19期生には有島武郎、森本厚吉ら多くの俊英たちが在学し、卒業後も華々しい活躍を展開します。

展示資料は、在学時代の有島武郎が森本厚吉と著した『リビングストーン伝』，“納豆博士”と称された半澤洵（第19期生）の納豆関係資料、留学生や沖縄出身の学生の入学書類、日本の運動会のルーツのひとつ「遊戯会」の関係資料などです。あわせて、星野勇三（第19期生）、川嶋一郎（第23期生）などの学生時代の回想をパネル展示しています。


展示からは、札幌農学校が活況を呈した時代に、さまざまな学生生活が繰り広げられた様子を知ることができます。現在の学生生活を実り多いものにし、また、新たな大学像を描く手掛かりを示してくれることでしょう。展示は5月15日（土）まで開催しています。ぜひ、ご一覽下さい。



展示風景



有島武郎・森本厚吉が新渡戸メアリーに贈った『リビングストーン伝』（附属図書館蔵）



川嶋 一郎 (1880-1976年)
 岩手県二戸市福岡出身 第23期生(1900-1906年在学)
 畜産学専攻、畜産技師・福岡町長
 月寒種牛牧場を皮切りに農商務省技師を勤め、千葉県や群馬県二戸郡福岡町の行政に関わった。

トルストイ中毒

私はその頃、足助（素一）であったか、末光（頼）であったか、いづれその仲間の者から徳富蘆花の『思い出の記』を借って読んだ、面白いなあ、と思った、それから又民友社の十二文学の内の矢張り蘆花著の『トルストイ伝』を借ってよんで、こんどはスッカリ「トルストイ」に敬服して、今度はトルストイの著書を読み初めた、勿論その頃は、まだトルストイの著書の日本語はない時であったから、東京の丸善書店から英訳書を取りよせて読んだ、短編物は簡単に読み終へられたが、『レヂュアレクション』（復活）などは毎日数枚一読して、何ヶ月かかかって読了したろう、…『ウォー、エンド、ピース』（戦争と平和）なども（達友）夜学校の報酬で買い求めたが、これはどう一手をかけかねた…大部冊のものは日本語でも読みかねる。

（「読草 後編」）

川嶋一郎（第23期生）の回想パネル

（附属図書館・大学文書館）

第4代総長 今裕の墨蹟を受贈

2月18日(木)、大学文書館では、高橋将氏(元工学部教員)のご仲介により、泉澤正行氏(1958年法学部卒業)から第4代総長 今裕の墨蹟をご寄贈いただきました。

墨蹟は、今裕総長が1942年2月に揮毫し、泉澤好氏(正行氏のご尊父)に贈呈したものです。当時、泉澤好氏は青函連絡船「翔鳳丸」の事務長を務めていました。今裕総長が翔鳳丸に乗船する折々、泉澤好氏は特別室で手厚くもてなしていました。今裕総長はこの厚遇に深く感謝し、泉澤好氏に、観梅を詠んだ自作と思われる漢詩を揮毫して贈りました。墨蹟の漢詩は下記のとおりです。

[関防印：善無常主]

適得梅花幾朶花 幽姿清韻身無倫
満筵諸彦俱三舎 讓席床頭為上賓
壬午二月録奪梅之詩 裕書

[白文印：今裕之印] [朱文印：東来学人]

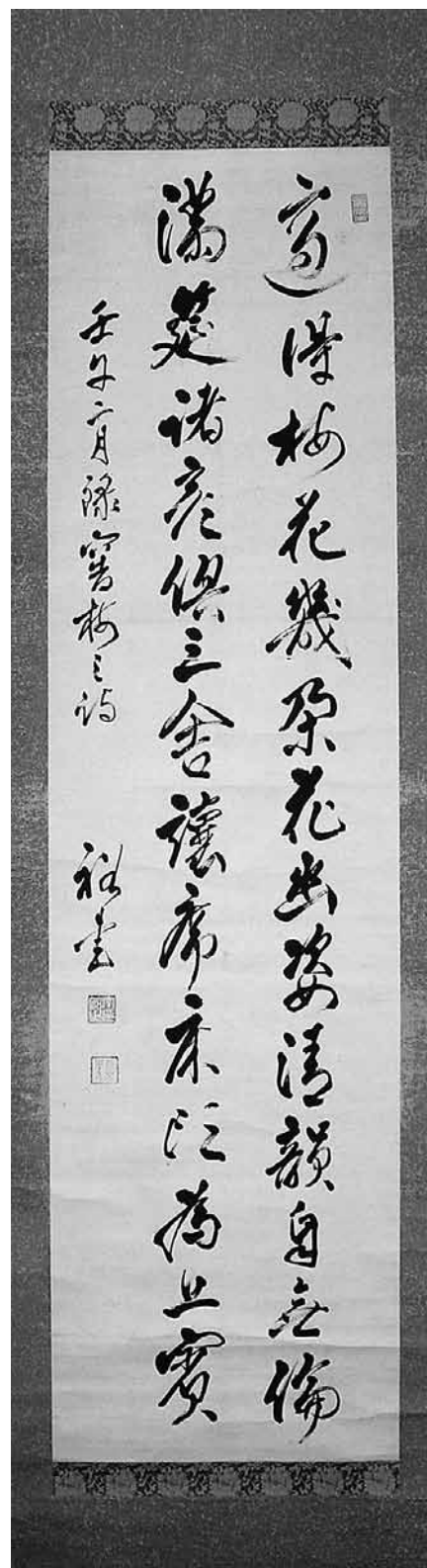
関防印の印文には、『尚書』咸有一徳篇から引いた「善無常主(善に常主無し=善には不変の基準はない)」という自戒の句が刻まれています。漢詩の訓読は以下のとおりです。

たまたま	え	ばい	か	いく	だ	はな
適々	得たり	梅花	幾朶	花		
い	うし	せい	いん	み	とも	がら
幽姿	清韻	身に	倫無	し		
まん	えん	しよ	げん	とも	さん	しや
満筵	の諸彦	俱に	三舎			
せき	ゆづ	しやう	とう	じやう	ひん	な
席を	譲り	床頭	に上	賓と	為す	
じん	こ	に	が	つ	かう	ばい
壬午	二月	奪梅	の詩	を録	す	裕書

大意は「梅花が見事だったので、上座に据えて皆で愛でた」というものです。訓読等については、弭和順教授(文学研究科中国文化論講座)にご協力いただきました。

この墨蹟は、北海道大学と地域の人々との交流史を彩るものです。今後、大学文書館では、墨蹟を大学沿革史料(歴代総長史料)として大切に保管し、展示等により活用してまいります。

(大学文書館)



今裕墨蹟 (1942年)

総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催

総合博物館では、平成16年より、パラタクソノミスト養成講座を開催しています。今年度は、北海道教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」のもとで計24講座が開講さ

昆虫パラタクソノミスト養成講座（初級）

1月30日（土）と31日（日）に、当館准教授の大原昌宏氏、大阪府箕面公園昆虫館学芸員の澤田義弘氏を講師に迎え、北海道大学総合博物館で開催され、学生や市民ら10名が参加しました。

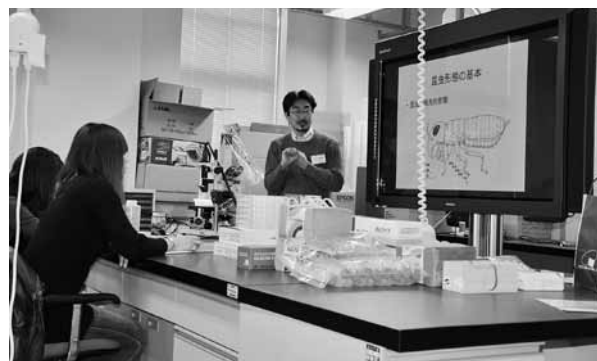
1日目の午前中は、まず、大原講師から講座内容の説明があり、その後、今回の講座で扱う昆虫の系統的位置づけや、昆虫の体の構造、外骨格の構造とその利点、昆虫綱の分類体系と各目の特徴などについての講義を受けました。午後からは、マレーズトラップで採集されたサンプルを用いて午前の講義を参考に、それらを目まで同定する実習に取り組みました。

2日目の午前中も、1日目に引き続き、ケニアのサンプルの目までの同定と、北海道の土壌から採集したサンプルの同定に取り組みました。昼食後は、午前に引き続き、土壌から採集

れ、1月～2月にかけては、下記の日程で3つの講座が開催されました。

各講座の参加者は、慣れない機材や用語にとまどいながらも、熱心に取り組んでいました。

したサンプルの目までの同定実習に取り組み、最後に、博物館の所蔵標本の観察ツアーを行い、実習では見ることのできなかった目の標本を観察したり、博物館での標本保存の様子について実際に見て回ったりしました。



昆虫パラタクソノミスト養成講座（初級）
において講義を行う大原講師

鉱物パラタクソノミスト養成講座（上級）

2月6日（土）と7日（日）に、理学研究院講師の三浦裕行氏を講師に迎え、北海道大学総合博物館で開催され学生や市民らが2月6日に3名、2月7日に3名の計6名が参加しました。今回の講座では、終日、粉末X線回折装置を用いて、参加者が持参した未知の鉱物を同定する実習を行いました。

まず、参加者が持参した未知鉱物を乳棒、乳鉢を用いて粉末状にし、粉末状になった未知鉱物をガラス板に盛り付けます。次に、そのガラス板を粉末X線回折装置に取り付け、回折装置を起動させ、測定を行います。最後に、回折装

置から得られた測定データを解析ソフトにかけ、それをもとに鉱物の同定を行いました。



鉱物パラタクソノミスト養成講座（上級）
において説明を行う三浦講師と参加者

鉱床パラタクソノミスト養成講座(上級)

2月13日(土)と14日(日)に、当館教授の松枝大治氏、九州大学工学研究院の高橋亮平氏を講師に迎え、北海道大学総合博物館で開催されました。

1日目の午前は、松枝講師による講義が行われ、本講座で実習予定の各種実験について、その目的、原理、やり方、諸注意などの説明を受けました。講義の後、実験室に移動し、岩石切断に用いるカッターや回転研磨板、ダイヤモンド研磨板などの機器についての説明を受け、それぞれ受講生が持参した岩石試料や博物館で用意した岩石試料を一人ずつ岩石カッターで切断しました。午後からは、引き続き岩石試料を2日目の実験で用いるサイズまでカットし、それを研磨する作業を行いました。

2日目は、午前・午後を通して1日目に仕上げた研磨片と博物館で用意した両面研磨片を用い、2人1組になって1組が加熱・冷却実験、

1組が反射率・硬度測定実験、残り2組は偏光顕微鏡で鉱物観察・流体包有物観察というようにローテーションを組んでそれぞれ実験を行いました。



鉱床パラタクソノミスト養成講座(上級)において試料をカットする作業に取り組む参加者

(総合博物館)

総合博物館土曜市民セミナー 「アンモナイトに取り憑かれて」が開催される

総合博物館では2月13日(土)、「北海道アンモナイト博物館」(北海道新聞社発行)の著者である、版画家福岡幸一氏(全道美術協会会員・日本古生物学会会員)の講演が行われました。この講演は、2月16日(火)から4月18日(日)まで開催されている「アンモナイト銅版画展」の関連講演で、アンモナイトの基礎知識や、歴代のアンモナイト研究者とのやり取りの談話をさせていただきました。講演者は、長年北海道でアンモナイト化石を収集しており、知識も豊富な方です。その知識をもとにして、それぞれのアンモナイトの特徴を銅版画として表現し、作品を仕上げています。そのため、作品には版画の芸術性だけではなく、科学的情報も組み込まれて、非常にユニークな展示になっています。本学総合博物館に所蔵されている模式標本の作品も作っており、その作品と標本も展示

されています。講演後は、聴講者を展示室に招き、個々に作品と標本の説明をしていただき、質問にも答えてもらいました。講演者と聴講者の交流が盛んに行われた充実した講演になりました。



講演する版画家 福岡氏

(総合博物館)

北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催

第4回公開研究会が、過去3回に引き続き、大学院理学院自然史科学専攻／高等教育機能開発総合センターの池田文人准教授を講師に迎え、「世界と対話する子どもたち」と題して、2月20日（土）に総合博物館1階「知の交流」コーナーにおいて開催されました。

今回も、過去3回の内容を簡潔におさらいすることから始まり、そこから「フィンランドの先生は子どもたちの何を観察しているのか」という話題が提起され、今回の本題へと進んでいきました。まず、日本の場合は、子どもたちが正しい知識を正確に理解し、記憶しているかどうかを観察しており、試験やテストにより確認されている。つまり、「今日までの発達水準」に重きが置かれていることが紹介されました。続いて、「教授・学習と発達の理論」としてピュアジェ、ジェームス、コフカ、そしてヴィゴツキーの理論を紹介しながら、日本がどの理論に基づいているかについて考え、それに対比する形で、フィンランドの場合は、子どもたちの「明日の発達水準」、「のびしろ」に重きを置いていることについて話していただきました。さらに、フィンランドでは、教育ばかりでなく、会社や企業（経済）、政治においても、「明日の発達水準」、「未来ののびしろ」というものに重きを置いているということを、若い

教育大臣や、Nokiaの携帯電話、Air Guitarの世界大会、ムーミン物語などを例に取りながら、話していただきました。

また、フィンランドの教育における課題として、移民問題や障害者学習、読書離れ、早期外国語教育などが紹介され、これらへのフィンランドの今後の対策は、日本の教育においても大きな参考になることを、そして、これから求められる教育として、脳の発達と教授・学習の関係に基づく教育、すなわち、学び直しをいかに促進させるかがこれからの教育には必要であり、それに不可欠な「他者」、「結合」、「感情」という3つの要素すべてが備わっているフィンランドの教育は、これからの教育を模索する上で大いに参考になるであろうことをご提案いただきました。

池田先生からの話題提供の後の質疑応答では、今回も、現職の教職員等から現場の実情を交えて多くの質問や意見も出されたほか、後半では、「フィンランドと比較して日本の教育が優れているところはどこか」という質問に対し、池田先生ばかりでなく、会場からも声が上がるなど研究会らしい活発な議論が展開されました。また、最終回ということもあり、これで終わってしまうことを惜しむ声も多く聞かれました。



講演する池田准教授



研究会の様子

(総合博物館)

お知らせ

平成22年度総合博物館の開館時間 休館日ならびに臨時休館日のお知らせ

○開館時間

- ・平成22年4月～平成22年5月(10:00～16:00)
- ・平成22年6月～平成22年10月(9:30～16:30)
- ・平成22年11月～平成23年3月(10:00～16:00)

○休館日：毎週月曜日

- ※月曜日が祝日の場合は翌日が休館日となります。
- ※5月の連休は開館し、その翌日が休館日となります。

○臨時開館

- ・平成22年8月2日(月)：オープンキャンパス

○臨時休館

- ・平成22年9月12日(日)：全学停電
- ・平成22年12月28日(火)～平成23年1月4日(火)：年末年始
- ・平成23年1月15日(土)～16日(日)：大学入試センター試験
- ・平成23年2月25日(金)・3月12日(土)：本学第2次入学試験

(総合博物館)

北大を去るにあたって

本年3月31日限りで定年退職される方々の略歴とお言葉を紹介します。

^あ ^べ ^{じゆん} ^{いち} 阿部純一氏 (文学研究科教授)



昭和21年10月31日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学工学部卒業
昭和49年3月
北海道大学大学院文科学研究科修士課程修了

昭和50年4月 北海道大学大学院文科学研究科博士課程退学
昭和50年5月 北海道大学文学部助手
昭和54年4月 北海道大学文学部講師
昭和62年8月 北海道大学文学部助教授
平成6年10月 北海道大学文学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授

北大の近くで生まれ、親をはじめとして多くの北大関係者に囲まれて育った私としては、自分もそこで学び、研究することがごく自然な流れであったように思われる。これは錯覚であったのかもしれないが、幼い私にとって、札幌は、古い神社仏閣が少ない代わりに、並木や洋館や教会の多い街であり、その風景の背後に札幌農学校以来のピューリタニズムを感じさせる街であった。十代の頃、初夏の白い光を浴びながら北大の農場や植物園を散歩すると、何かしら心洗われるような気持ちになったものである。その緑のキャンパスで、学生時代には友人たちと存分に遊び、そののちは、長く、よき同僚、よき学生たちに囲まれて研究生生活を送ることができた。まさに幸せなことであり、全てに感謝したい。ただ、時代は変わり、私にとっては“孤北のユートピア”、“ピューリタンの静謐な場”であったはずのこのキャンパスも、次第に世俗化し、最近では世の中央に対して精一杯の示威行為を行う単なる田舎になってしまったような気もする。これが、私自身が齢を重ねて錯覚なしに事実が見えるようになったせいなのか、それとも事実がそのように変わったせいなのか、いずれなのかは分からない。ただ少しく寂しく思われる今日この頃である。

^{あん} ^{どう} ^{あつし} 安藤厚氏 (文学研究科教授)



昭和22年1月13日生
(略歴)
昭和46年3月
東京大学教養学部卒業
昭和48年3月
東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了

昭和48年4月 東京大学教養学部助手
昭和54年4月 山形大学教養部講師
昭和55年4月 山形大学教養部助教授
平成2年4月 北海道大学文学部助教授
平成8年2月 北海道大学文学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授

大学教員として37年、北大では20年、お世話になりました。北大で最初の5年間は、ロシア語ロシア文学という小さな講座で研究三昧の黄金の日々でした。1994-95年にポーランド・ワルシャワ大学に遊学の機会を得て帰ると、所属が西洋文学講座と変わっていました。

その後は、高等教育機能開発総合センター、教育改革室関係のさまざまな仕事で多忙な日々でしたが、全学のさまざまな教職員のみなさまとともに仕事をさせていただく機会に恵まれ、多くのことを学ばせていただきました。お世話になりましたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

平成13年度進化するコアカリキュラムから18年度新教育課程・単位の実質化に至るプロセスの「PDCAサイクル」のはじめから終わりまでに関われたのは貴重な体験でした。

大学を取り巻く環境はさらに厳しさを増していますが、北大のますますの発展を心よりお祈りいたします。

せき
関たか
とし
孝敏

氏(文学研究科教授)

昭和21年12月8日生

(略歴)

昭和44年3月

岡山大学教育学部卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院文学
研究科修士課程修了

昭和51年3月 北海道大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学

昭和51年4月 広島修道大学人文学部講師

昭和53年4月 広島修道大学人文学部助教授

昭和57年4月 北海道大学文学部講師

昭和63年4月 北海道大学文学部助教授

平成8年4月 北海道大学文学部教授

平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授

「私のミニ北大農場」

全国に数多くの大学キャンパスがある。しかし、四季折々の絵葉書があり、かつまた国内外の観光客が数多く訪れるキャンパスは、北海道大学の他に例がないのではなかろうか。こうした大学に幸いにも、28年間在職し得た人生の巡り合わせに感謝せずにいられない。この間、ご交誼をいただき、支えて下さった数多くの方々、に心より御礼申し上げます。

ところで、「私のミニ農場」は、かつて農学部附属した、樹木の種苗育成実験施設であり、農学部棟の南西端から、高架の橋を渡ったところにある。

このミニ農場では、閑静で人に出くわす機会は少ない。原生林とおぼしき木立の散策は、しばし至福の時を与えてくれた。90年代前後から、大学改革論議が高揚し、年齢的に40歳代半ばであつた当時の私は、ふた桁の委員会業務もあり、疲れることが多かった。こうした時、秘密のミニ農場を訪れ、何度も癒しと思案の時をいただいた。このミニ農場にも感謝しつつお礼を申し添えたい。

み
崎ひさし
壽

氏(文学研究科教授)

昭和21年8月22日生

(略歴)

昭和44年3月

東京教育大学文学部卒業

昭和46年3月

東京教育大学大学院文科学
研究科修士課程修了

昭和51年3月 東京教育大学大学院文科学研究科博士課程単位修得退学

昭和51年4月 立正女子大学(現文教大学)教育学部専任講師

昭和56年4月 文教大学教育学部助教授

昭和58年4月 北海道大学文学部助教授

平成7年6月 北海道大学文学部教授

平成12年4月 北海道大学大学院文学研究科教授

平成12年2月 } 北海道大学評議員

平成14年3月 }

平成14年4月 } 北海道大学大学院文学研究科長

平成16年3月 }

北海道とも北大ともまったく無縁だった私が初めて津軽海峡を渡って札幌にやって来てから、何かと躓きながらも定年まで27年間にわたってこの大学に勤務できたのは、ひとえに歴代の学生諸君や同僚の教職員の皆さんの御寛恕の賜物です。ありがとうございます。

前半の助教授時代は、国語国文の学界でもトップクラスの同僚教師陣と才気(および稚氣)あふれる学生諸君に囲まれて、ひたすら教育と研究に邁進することができました。後半になると、学部改組、重点化、法人化などの波に次々と襲われ、文学研究科固有の問題の処理にも振り回され、時世の変化とは言いながら北大も何だかおっとりしたところがなくなったな、などとぼやきながら、辛うじて自分の研究を本にまとめ、若い研究者を学界に送り出し、北大の教師として最低限の務めを果たしたと思っています。

今は移りゆく時見るごとに心痛く昔の人し思ほゆるかも(『万葉集』大伴家持)という心境です。

北大を去るにあたって

穂 貫 俊 文 氏

(法学研究科教授)



昭和21年7月24日生
(略 歴)
昭和47年3月
北海道大学法学部卒業
昭和50年3月
北海道大学大学院法学
研究科修士課程修了

昭和53年3月 北海道大学大学院法学研究科博士課程単位修得退学
昭和56年9月 法学博士(北海道大学)
昭和53年4月 北海道大学法学部助手
昭和56年4月 図書館情報大学図書館情報学部助教授
昭和61年4月 金沢大学法学部助教授
昭和62年10月 金沢大学法学部教授
平成3年4月 北海道大学法学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院法学研究科教授

北海道大学法学部助手を経て、筑波や金沢で10年余、母校で20余年教壇に立ちこの3月に停年を迎えました。全道、全国から来た法学部学生や法科大学院生、中国やオーストリアから来た留学生など北海道大学の門をくぐった若者たちと共に時間をもてたことは教師として幸せなことでした。北海道大学法学部・法学研究科は、日本の経済法(独禁法)研究のメッカとされています。今村成和博士を先頭に、丹宗昭信教授、実方謙二教授、厚谷襄児教授という経済法の碩学が教授陣を構成してきました。私とその末端に繋がったことは誠に光栄というほかありません。それに相応しい業績を達成できたかどうかは人の評価を待つほかありませんが、恵まれた研究環境の中で思うように研究に取り組むことができました。これも実に多くの方々の支援によるもので、感謝の念に堪えません。

札幌は私が生まれ育った街であり、北海道大学は私の母校です。今後は札幌にあって一同窓生として、北海道大学の発展を見守り応援したいと思います。

小 島 廣 光 氏

(経済学研究科教授)



昭和21年4月30日生
(略 歴)
昭和44年3月
名古屋大学経済学部卒業
昭和46年3月
名古屋大学大学院経済
学研究科修士課程修了
昭和50年3月
名古屋大学大学院経済学
研究科博士課程単位修得退学

昭和50年4月 名古屋大学経済学部助手
昭和52年4月 名古屋工業大学工学部助手
昭和54年7月 北海道大学経済学部助教授
昭和60年7月 経済学博士(名古屋大学)
平成元年7月 北海道大学経済学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院経済学研究科教授
平成8年4月 } 北海道大学評議員
平成9年7月 }
平成13年5月 } 北海道大学総長補佐
平成15年4月 }

幸運なめぐり合わせで、北海道大学に助教授として赴任してから、31年が経過し、早くも退職の時を迎えます。赴任した最初の冬、中央ローンで同僚の教員からスキーの指導を受けたことは、懐かしい思い出です。

長年にわたりお世話になった経済学研究科・経済学部には、自由な雰囲気と自主性が溢れ、楽しく研究と教育に没頭することができました。貴重な助言を頂いた同僚の教員、また多くの有能な学生にめぐり会えたことを心から感謝しています。

大学を取り巻く環境が大きく変わり、北海道大学も大きく変貌しました。しかし今後とも、北海道大学が、世界を導くような優れた人材を輩出し、学術研究の先端を切り開いていくことを心から期待しています。

た なか しん いち
田 中 慎 一



氏(経済学研究科教授)

昭和22年1月1日生

(略 歴)

昭和45年4月

東京大学経済学部卒業

昭和47年3月

東京大学大学院経済学

研究科修士課程修了

昭和50年3月

東京大学大学院経済学研究

科博士課程単位修得退学

昭和50年4月 東京大学社会科学研究所助手

昭和54年1月 北海道大学経済学部助教授

平成2年7月 北海道大学経済学部教授

平成10年1月

平成11年7月 } 北海道大学評議員

平成12年4月 北海道大学大学院経済学研究科教授

平成15年4月

平成16年3月 } 北海道大学経済学部経済学科長

百人一首の、立別れいなばの山の嶺におふる
まつとしきかば今かへりこむ、の因幡国は鳥取
市で生れ育つ。小学校時代、熊遣いの名手アイ
ヌを見学、また収集中の国立公園記念切手のな
か、阿寒・大雪山・支笏洞爺に見入る。自宅1
浪時代に旺文社の大学受験ラジオ講座で、「都
ぞ弥生」(後年、これが我が国最高の寮歌とい
う音楽評論家の評価を知る)を傾聴。その異
風、魅力、妙調に堪えたり。いちおう学に志し
郷関を出て、13年逗留した「東の京都」(荷
風)、これ以上の東行はあるまいと予断した山
陰人は、一躍北上渡海、果ては道産子の如し。
島流し後土着、の月旦評に耐えたり。爾来31
年、全学の善き事務官・事務職員の方々に支え
られ、学部内外の良き同僚諸兄と同席し、国内
外の前途有為な学生諸君に囲まれ、辛くも研
究・教育に邁進たらんと努めえたことは、私半
生の僥倖でありました。ここに無上の御礼申し
上げます。すぐ役に立つということはすぐ役に
立たなくなることだ、とは小泉信三の苦言であ
る。文系の、しかもその一部に限る戒めではあ
ろう。お金で買えぬ伝統という財産豊かな本
学、北辺の風土を活かし、最高学府に相応しい
教養を土台に、学術発展の文系・理系雁行形態
をとられるよう期待します。わたくしのような
者でも、厳肅諧謔の内村鑑三、博識温顔の新渡

戸稲造、両先生の励ましを読み取り、今日に
到ったのであります。難有うございました。お
わりにのぞみ、流離の啄木に「函館の青柳町こ
そかなしけれ友の恋歌矢ぐるまの花」と詠ませ
た同じ町内に置かれた、隅の首石の如き文学碑
の四行書きの刻字を転記いたします。「人生/
邂逅し/開眼し/瞑目す」(亀井勝一郎)

毛 利 峻 治 氏 (経済学研究科教授)



昭和21年7月18日生
(略 歴)
昭和45年3月
早稲田大学理工学部卒業

昭和45年4月 } 民間 (株式会社日立製作所)
平成14年9月 }
平成7年3月 } 博士 (工学) (東京大学)
平成11年4月 } 横浜国立大学工学部非常勤講師兼任
平成14年12月 }
平成14年10月 } 北海道大学大学院経済学研究科教授

学生を送り出し学生を迎える時期がまた巡ってくる。

気が付くと企業・大学とこの数十年をただひたすらに走り抜けてきたように思える。

講義では常に最新の情報 (統計データ, システム例, 理論) を紹介すべく日々材料を渉猟し資料制作を続けてきた。

藤村の千曲川旅情の歌「きのうまたかくてありけり きょうもまたかくてありなむ この命なにをあくせく あすをのみ思ひわづらふ」の感。

これからは自由になる時間のすこしを自分・社会に, そして大部分を家族に…

岸 玲 子 氏 (医学研究科教授)



(略 歴)
昭和46年3月
北海道大学医学部卒業
昭和52年3月
北海道大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和52年3月
医学博士 (北海道大学)

昭和52年4月 } 札幌医科大学医学部助手
昭和54年9月 } 米国マイアミ大学心理学部客員助教授
昭和55年9月 } 札幌医科大学医学部助手
昭和60年10月 } 札幌医科大学医学部講師
平成元年8月 } 米国ハーバード大学公衆衛生大学院出張 (公衆衛生学修士)
平成9年3月 } 札幌医科大学医学部助教授
平成9年9月 } 北海道大学医学部教授
平成12年4月 } 北海道大学大学院医学研究科教授

定年退任後, 本年4月1日から北海道大学に新たにできる全学共同利用施設「環境健康科学研究教育センター」のセンター長・教授になる予定です。センター設置の目的は, 地域社会に根ざしながらグローバルな視点で人々の健康増進と社会発展のための総合的で高度な教育や研究開発を推進していくことです。人間の健康は多くの環境因子の影響を受けており, また私達の社会活動は自然を大きく変化させています。私自身はこれまで環境化学物質の次世代影響の解明, 職業がんや有機溶剤中毒などの予防, 地域高齢者の社会的サポートネットワークと心身の健康に関する研究, シックハウス症候群の原因解明のための全国疫学研究など多様な研究に従事してきました。それらの経験を活かして, 本学が現在重点的に教育研究を進めているSustainability の分野で, 「環境と健康」に焦点をあてて, 微力ですが一層の努力を続けてまいります。

さ さ き ふみ あき 氏 (医学研究科教授)



昭和21年8月20日生
(略歴)
昭和47年3月
北海道大学医学部卒業
昭和60年8月
北海道大学医学部助手
昭和60年9月
医学博士(北海道大学)

平成3年5月 北海道大学医学部講師
平成9年10月 北海道大学医学部助教授
平成11年11月 北海道大学医学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

1972年北海道大学医学部を卒業後、他病院に勤め、1975年から医者としての仕事と研究のほとんどを北海道大学医学部、病院で行ってきました。この間数年の他院での勤務とアメリカ留学があったのみです。“小児外科”分野を専門としたことは今になってみると非常に良かったです。当時は、日本での小児外科の発展期にあたり、この領域の目覚ましい進歩を体験でき、少しはこの領域の発展に貢献できたことを幸いに思っています。新たな分野ができたことで小児外科の診療・研究に携わってきた諸先生の積年の希望がかない、さらに北海道での小児外科の発展の基盤となることができました。私としては、もっと仕事をできたのではなかったかと、反省すべき点もあります。後輩がこの領域で、一層頑張ってくれることを望みます。北海道大学の今後一層の発展を祈念しております。最後に、これまでお世話になりました皆様に心よりお礼を申し上げます。長い間ありがとうございました。

ふく しま きく ろう 氏 (医学研究科教授)



昭和22年1月10日生
(略歴)
昭和46年3月
北海道大学医学部卒業
昭和50年3月
北海道大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和50年3月
医学博士(北海道大学)

昭和50年5月 北海道大学医学部助手
昭和57年11月 北海道大学医学部講師
昭和62年1月 北海道大学医学部助教授
平成8年8月 北海道大学医学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院医学研究科教授

北海道大学には、1965年、当時の医学進学課程入学以来、退職を迎えた今日まで、45年間、大変お世話になりました。北大構内を私が始めて訪れたのは受験のときでした。創設期の北大の、殻を破って外に向かおうとする気風に憧れていたのも、受験の折、空高く聳えていた楡の木々を目の前にして、この憧れと重なるのを感じた時の感動を今でも忘れません。

これまで、北大で研究を継続できたのは、医学部・大学院医学研究科の教員および事務の皆様、特に、私が所属した生理学第二講座と認知行動学分野の全教室員の皆様のおかげです。感謝しています。医学部・医学研究科の学生さん方には、医療と医学の進歩のため、初心を忘れず、努力を継続されることを期待し、北大医学研究科退任の言葉と致します。有り難うございました。

北大を去るにあたって

ほん ま けん いち
本 間 研 一

氏 (医学研究科教授)

昭和21年11月10日生

(略 歴)

昭和46年 3月

北海道大学医学部卒業

昭和52年 3月

北海道大学大学院医学

研究科博士課程修了

昭和52年 3月

医学博士 (北海道大学)



昭和46年 4月 } 医療法人社団慶愛会札幌花園病院
 昭和48年 3月 }
 昭和52年 4月 北海道大学医学部助手
 昭和55年 2月 北海道大学医学部講師
 昭和57年 5月 北海道大学医学部助教授
 平成 4年 1月 北海道大学医学部教授
 平成12年 4月 北海道大学大学院医学研究科教授
 平成17年 4月 } 北海道大学大学院医学研究科長,
 平成21年 3月 } 医学部長, 評議員
 平成21年 4月 } 北海道大学脳科学研究教育セン
 平成22年 3月 } ター長

昭和40年 4月, 北海道大学医学進学課程に入
 学して以来, 西ドイツ・マックスプランク研究
 所に留学していた1年6カ月を除いた43年と6
 カ月の間, 北大キャンパスで過ごさせて頂きま
 した。父, 祖父も北大に奉職した3代にわたる
 北大家系で, 妻, 娘も北大で仕事をしておりま
 す。子供の頃から北大で遊び, 北大で育ちまし
 た。北大は私の人生の場であり, これからも何
 かとお世話になると思います。北大での思い出
 は, なんといっても学生時代の学園闘争。正門
 横の事務局が炎上するのを複雑な思いで眺めて
 いたことを思い出します。象牙の塔に対する批
 判から, 何に対しても「社会に役立つ〇〇〇」
 がキャッチフレーズとなり, 私もどっぷりと漬
 かってきました。退職後は, 世俗を離れて真理
 探究に没頭することも呆け対策の1つかと思っ
 ています。現在, 日本の大学は正念場を迎えて
 います。米国モデルが良いのか, 欧州モデルが
 良いのか, どちらにせよ人材育成の場, 社会の
 オピニオンリーダーとしての大学の復権を切に
 希望します。

まえ ざわ まさ じ
前 沢 政 次

氏 (医学研究科教授)

昭和22年 3月31日生

(略 歴)

昭和46年 3月

新潟大学部医学部卒業

昭和46年 5月

国立東京第一病院

昭和49年 4月

自治医科大学シニアレジデント



昭和50年10月 自治医科大学助手
 昭和54年 4月 自治医科大学講師
 昭和55年 8月 大分県立療養所三重病院副院長
 昭和56年 6月 自治医科大学講師
 昭和59年12月 自治医科大学助教授
 昭和63年 4月 宮城県涌谷町町民医療福祉セン
 ター病院開設準備室技術参事
 昭和63年11月 宮城県涌谷町町民医療福祉セン
 ター所長・涌谷町国保病院長
 平成元年 3月 医学博士 (自治医科大学)
 平成 8年 5月 北海道大学医学部附属病院教授
 平成14年 4月 北海道大学医学部医学教育開発室長北海道大学
 医学部附属病院臨床研修センター副センター長
 平成17年 6月 北海道大学大学院医学研究科教授
 平成20年 3月 教育学修士 (北海道大学)

退職にあたって

早いもので北大に赴任して14年が過ぎよう
 としております。1996年, 当初の赴任先は医学部
 附属病院総合診療部でした。医学も医療も専門
 細分化が著しく進み, 大学病院を受診してもど
 の科で診療を受ければよいか不明な人のための
 振り分け外来, 縦割り臓器別の診療科に振り分
 け困難な患者の継続的診療を担当し, 医学部学
 生には基本的診療手技を教育しました。診療面
 では大学が法人化し, 病院も多額の借金を返さ
 なければならなくなり, 2005年この部は収入額
 が低いとの理由で廃止となりました。

研究と教育を大学院において担当すること
 となり, 2005年 6月 から医学研究科医療システム
 学分野に異動となりました。診療や教育に関す
 る質的研究, 難病患者の生活の質調査を開始し
 たところ, 大学院生も多く集まるようになり,
 少し成果が上がったところで退職を迎えること
 となりました。北大ではたくさんの方々にお世
 話になり感謝しています。

た むら しん いちろう
田 村 信一郎

氏 (工学研究科教授)

昭和21年8月26日生

(略 歴)

昭和45年3月

大阪大学理学部物理学
科卒業

昭和47年3月

北海道大学大学院理学
研究科修士課程修了

昭和50年9月 北海道大学大学院理学研究科博
士課程単位修得退学

昭和50年10月 北海道大学工学部助手

昭和55年3月 工学博士(北海道大学)

昭和61年4月 北海道大学工学部助教授

平成5年4月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授



みや うら のり お
宮 浦 憲 夫

氏 (工学研究科教授)

昭和21年7月2日生

(略 歴)

昭和44年3月

北海道大学工学部合成
化学工学科卒業

昭和46年3月

北海道大学大学院工学
研究科修士課程合成化
学工学専攻修了

昭和46年4月 北海道大学工学部助手

昭和51年12月 工学博士(北海道大学)

平成2年1月 北海道大学工学部助教授

平成6年4月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授



約35年前、幸運にも佐久間哲郎先生に工学部の助手として採用していただき、以来主に工業(応用)数学を中心とした工学部の専門基礎教育と、応用物理学科、大学院応用物理学専攻等での物理学の教育に携わってきました。一方研究面では、特に意識していた訳ではありませんが、1960年前後の戸谷先生、堀先生のオリジナルな仕事に端を発し、以来北大の伝統として半世紀の間途絶える事なく続いてきた、フォノン(格子振動の量子)物理学の研究の流れにのって、国際的な共同研究も積極的に押し進めながら今日までやってきました。北大が今後もフォノン研究の世界的な拠点として、国際的に認知され続けて行くのか、あるいはこの50年を節目として、より魅力的な新たなテーマで研究の潮流を築いて行くのか、いずれにせよ私よりも若く、かつ優秀な研究者たちの好奇心や努力に懸かっております。一層の御発展を望みます。

昭和43年に旧合成化学工学科で伊藤光臣先生と鈴木章先生に卒業論文指導を受けて以来、一貫して有機化学におけるホウ素化合物の研究を継続してきた。他の道を考えなかったわけではないが、元来不器用な私には一意専心がふさわしかったのかもしれない。化学は多様であり一般に結果を予測することは難しい。この多様性は化学における理論的研究を大きく遅らせたが、逆に将来にわたり発展し続けることを約束してくれたものである。多様性から生まれる予想外の結果は化学を志す者を常に興奮させてきたし、今後も決してうらぎるとは思えない。元素の組合せから生まれる物質の機能も実に多様であり、従来の枠組みから他に目を転じると、尽きることない可能性が存在するはずである。お陰様で一時も退屈することなく、日々うきうきと研究生活を送れたことに深く感謝している。

北大を去るにあたって



棟方正信氏 (工学研究科教授)
 昭和21年7月26日生
 (略歴)
 昭和44年3月
 北海道大学農学部農芸
 化学科卒業

昭和44年4月 } 民間(サッポロビール株式会社)
 平成6年3月 }
 昭和57年6月 農学博士(東京大学)
 平成6年4月 北海道大学工学部助教授
 平成7年4月 北海道大学工学部教授
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
 平成16年4月 } 北海道大学大学院工学研究科
 平成18年3月 } 副研究科長

憧れて入学した農学部4年間とセカンドライフ16年間の通算20年間、北大で過ごせたことは幸せでした。平成16年度改組時に文部科学省担当官から「博士の充足率が低いのに定員を削減するとは何事か」と指導をうけ、企業人時代に考えていた博士課程学生への経済的支援、研究費補助、リーダーシップ育成などを企画し制度化しました。1年後中教審答申「新時代の大学院教育」にこれらの施策が記載されており、お墨付きを貰いました。「魅力ある大学院」イニシアティブに採択され、先取りした施策を資金的に助成できたのも幸運でした。更にRA活用の経済的支援策が、全国の大学に波及したことは驚きでした。研究は再生医療をターゲットに行いましたが、中でもマスコミに人気があったのが「鮭コラーゲン研究」で、再生医療用に使用できなかった鮭コラーゲンを人工血管作製までこぎつけ、新聞、TV等に10回取り上げられ、また経済産業省「第2回ものづくり大賞」優秀賞を戴きました。これらは小職の研究室出身の優秀なスタッフ、卒業生によるもので、北大の良さ、開拓者魂を受け継いだ学生が育ったと自負しています。今後も開拓者魂を育む環境を維持されんことを願う次第です。



上館民夫氏 (工学研究科教授)
 昭和22年2月16日生
 (略歴)
 昭和44年3月
 北海道大学工学部応用
 化学科卒業
 昭和46年3月
 北海道大学大学院工学
 研究科応用化学専攻修
 士課程修了

昭和49年3月 北海道大学大学院工学研究科応
 用化学専攻博士課程修了
 昭和49年4月 } 民間(三菱油化株式会社, 株式会社
 昭和61年7月 } 三菱油化メディカルサイエンス)
 昭和61年8月 北海道大学工学部講師
 昭和62年10月 北海道大学工学部助教授
 平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助
 教授
 平成10年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

民間企業で12年間勤務したのち、北大に赴任し、大学という職場での教育・研究のありようを模索しているうちに、23年が過ぎてしまいました。その間、研究テーマを自由に選択でき、また、研究指導を通して学生の成長を肌で感じることができる環境で仕事できたことを幸せに感じております。大学に赴任した当時、20数年後の北大がどのようになっているかなど思いもよりませんでした。いま、退職するにあたってあらためて大学の現状を見ますと、20数年の間に大学の有様も大きく変わってきたように感じます。これまでの諸々の試みが「失われた20年」とならなければよろしいのですが。最後に北海道大学の発展を祈念するとともに、お世話になった多くの方にお礼申し上げます。

嶋田志郎 氏

(工学研究科教授)

昭和21年6月27日生

(略歴)

昭和44年3月

北海道大学工学部応用

化学科卒業

昭和46年3月

北海道大学大学院工学

研究科応用化学専攻修

士課程修了

昭和49年3月 北海道大学大学院工学研究科応
用化学専攻博士課程修了

昭和49年4月 北海道大学工学部助手

昭和61年4月 北海道大学工学部助教授

平成6年6月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授



島津洋一郎 氏

(工学研究科教授)

昭和21年7月25日生

(略歴)

昭和44年3月

防衛大学校理工学専攻

電気工学専門課程卒業

昭和44年10月

防衛庁陸上自衛隊幹部

候補生学校修了

昭和44年10月 防衛庁陸上自衛隊健軍駐屯部隊

昭和45年2月 } 民間(三菱重工業株式会社)
平成10年12月 }昭和47年6月 工学修士(カリフォルニア大学
バークレイ校)

昭和56年3月 工学博士(東京大学)

平成11年1月 北海道大学大学院工学研究科教授



私は、学内において留学生を含む学部学生、大学院学生の教育・研究指導にあたり、学外では九州大学を始めとして各大学の非常勤講師を務めるなど、本学以外の学生の教育にも尽力しました。研究に関しては、炭化物・窒化物材料及びそれらの複合材料の新規合成プロセスの開発に関する研究を精力的に進めました。学部内では学科長・専攻長を始めとして各種委員会委員を務め、触媒化学研究センターでは協議員会、運営委員会の委員を歴任し大学運営にも務めました。学外においては、日本化学会北海道支部長、日本セラミックス協会東北・北海道支部長、同基礎科学部会長などを歴任し、学術の発展に寄与するとともに国内の学会の運営に大きく貢献し、さらに、様々な国際学会や国内学会の実行委員長や委員会委員も務めました。北大に入学し卒業し、ここで教員になり、学生時代も含めると45年間の永きにわたり、北大には大変お世話になったことを心から感謝します。

北大に赴任した日は、平成11年1月1日であることから、大変覚えやすく、一種の親しみさえ感じていたが、その日から丸11年が過ぎた。まさに光陰矢のごとしである。北海道との関わりは、今から38年前に北海道に初めて訪れた時に始まった。その後、三菱重工の社員として、北海道電力、泊原子力発電所の設置許可申請業務に従事したときである。このころは、北大に奉職するなどは、想像もしていなかった。

北大に着任後も、従来と同じ分野の原子炉設計、制御、炉心特性評価を中心に、教育、研究を進めることが出来、職場変更のギャップもなく、北大での生活に馴染むことができた。北大では毎年本当に良い学生に恵まれ、大過なく、無事に職務を完遂できたことを周りの皆様に心から感謝している。まことに、北大は去り難いところではありますが、これまでの御縁を大切に、今後もエネルギーの安定確保に微力ながらも貢献していきたいと思っております。

たけだ
武田

やすし
靖氏 (工学研究科教授)



昭和21年7月20日生
(略歴)
昭和45年3月
東北大学工学部原子核
工学科卒業
昭和47年3月
東北大学大学院工学研
究科原子核工学専攻修
士課程修了

昭和51年3月 東北大学大学院工学研究科原子
工学専攻博士課程単位修得退学
昭和51年4月 東北大学工学部助手
昭和53年12月 工学博士 (東北大学)
昭和58年7月 スイス国立パウルシェラー研究
所研究員
平成9年1月 博士 (理学) (東京大学)
平成14年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

20年以上の海外生活の後、平成14年に着任いたしました。研究・教育活動の国際展開を目指して活動してきましたが、最後まで外人としての違和感がなくならないままに、定年退職することになりました。独立法人としての負の側面ばかりが強調されて、親離れのできない組織は、ただただ縮む方向にしか向かいません。発想を転換してよりよい研究と教育の成果が生まれる方策を希望します。在職中のご支援ありがとうございました。

おおぬまひろし
大沼博志氏 (工学研究科教授)



昭和21年5月12日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学工学部土木
工学科卒業

昭和44年4月 } 財団法人電力中央研究所
平成9年3月 }
昭和60年3月 工学博士 (北海道大学)
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

昭和44年に北海道大学を卒業後、財団法人電力中央研究所に28年間勤務し、主に発電所施設コンクリート構造物の研究開発に従事してきました。その後、平成9年に母校である北大工学研究科に採用され、13年間にわたって教育と研究に当たりました。電力中央研究所は民間の研究施設ですので、実用化研究やプロジェクト研究を多く実施してきましたが、北大では希望していた基礎的な研究にかかわったことが喜びでした。また、学生の教育を担当したことで、若い学生諸君を教育指導し、時には一緒にお酒を飲みながら議論する貴重な経験をしました。ただ、民間のピラミッド型の組織からフラットな組織に移りましたので、大学の組織運営にはいささか戸惑いました。両者には長所と短所がありますが、大学組織の欠点は決定が遅く、決定のための会議が多いということです。北大はわが国有数の環境に恵まれた大学です。このような大学で13年間にわたって研究と教育に励んだことを誇りにしたいと思います。

ささ 谷

つとむ

氏 (工学研究科教授)



昭和21年5月5日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学理学部卒業
昭和45年3月
北海道大学大学院理学
研究科地球物理学専攻
修士課程修了

昭和47年10月 北海道大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程中退
昭和47年11月 北海道大学理学部助手
昭和54年3月 理学博士(北海道大学)
昭和57年1月 北海道大学理学部講師
平成6年4月 北海道大学理学部助教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

大学院時代から退職までの約40年間、一貫して「強震動地震学」の研究を続けてきました。この研究は、地震波を発生する地震の震源特性、発生した地震波の伝播特性、そして、地表近くの地盤による地震波の増幅特性と広い分野をカバーしており、理学的な研究である「地震学」と工学的な研究である「地震工学」との境界領域に位置しています。この40年間の震源モデルの発展、コンピュータの発展、強震観測システムの発展等により、ある断層で地震が発生した場合に、ある地点でどのような強震動が観測されるかを予測できるようになります。私は、特に、日本列島下に沈み込む海洋プレート内で発生するスラブ内地震(例えば、1993年に発生した釧路沖地震(Mw7.6))による強震動予測を中心に研究を行い、その予測手法の確立に貢献してきました。最後の3年間は工学研究科に勤務し、同研究科に「強震動地震学」の種をまいたつもりです。やがてその芽の出ることを期待しつつ退職いたします。長い間お世話になりました。

こ ぼやし ひで つぐ 林 英 嗣

氏 (工学研究科教授)



昭和21年5月23日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学工学部建築
工学科卒業
昭和46年3月
北海道大学大学院工学
研究科建築工学専攻修
士課程修了

昭和46年4月 北海道大学工学部助手
昭和61年3月 工学博士(北海道大学)
昭和61年5月 北海道大学工学部助教授
平成7年4月 北海道大学工学部教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年4月 } 北海道大学役員補佐
平成22年3月 }
平成18年5月 中国・同済大学客員教授

建築都市学を学び始めた若年期での多くの師との出会い。研究者の中年期を決定的なものにした多くのよき友人との持続的な交流。大学晩年期における臨床都市計画学への研究姿勢やライフスタイルを決定付けた、国内と国際プロジェクトへの継続的参加と実践化を通して広がった国内・国外のグローバルなネットワーク。45年間、志を育む美しいキャンパスを拠点として、師・友・後輩との邂逅によって自分なりに充実した教育研究生活を送ることが出来たことに感謝したい。

国際的な知の創造拠点として、世界的視野を持ち活躍できる人材を育成しつつ、国際的に高い評価が得られる臨床的研究と社会化を目標とした活動への努力が渦巻き発展することを期待します。

北大を去るにあたって

つね かわ まさ み 氏 (工学研究科教授)



昭和22年1月22日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学工学部釧山
工学科卒業
昭和46年3月
北海道大学大学院工学
研究科釧山工学専攻修
士課程修了

昭和46年4月 北海道大学工学部助手
昭和57年6月 北海道大学工学部講師
昭和57年9月 工学博士(北海道大学)
昭和60年9月 北海道大学工学部助教授
平成6年7月 北海道大学工学部教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院工学研究科
平成22年3月 副研究科長

寮歌「都ぞ弥生」に詠われた北の大地に憧れ、そこで学びたいと、故郷名古屋を後にして、北大に入学してから早いもので45年が過ぎ、今春停年を迎える。苦しい時期、悩んだときがまったくなかったわけではないが、なぜかあまり覚えていなくて、楽しい愉快的出来事ばかりが思い出され、素敵な仲間や学生に囲まれ、笑顔や笑い声に囲まれ快適な生活ができたことに感謝している。研究は、釧山・炭鉱における選別技術の開発からスタートしたが、いつしか廃棄物を対象とした研究に移り、やがて今話題の「都市釧山」の具現化に向けた研究へと発展させることができた。このように自由に研究テーマを選び、闊達な雰囲気の下で研究できたことに、厚くお礼申し上げる。また、学生時代に創立に関わった落語研究会が、その後順調に成長し、OB、顧問として関わる中で、3年前に全日本学生選手権大会(策伝大賞大会)の準優勝者がでたのも楽しい思い出として忘れられない。北大が自由闊達な個性輝く大学としてこれからも発展し続けることを、心より願ってやまない。

たか しま いく お 氏 (獣医学研究科教授)



昭和22年2月11日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学獣医学部卒業

昭和45年6月 北海道大学獣医学部助手
昭和51年2月 }
昭和52年5月 } 米国ウイスコンシン大学大学院
獣医学研究科修士課程修了
昭和54年5月 } 米国ウイスコンシン大学大学院
獣医学研究科博士課程修了
昭和54年5月 } Ph.D(米国ウイスコンシン大学)
昭和54年8月 } 米国ウイスコンシン大学大学院
昭和55年9月 } 獣医学研究科研究員
昭和55年10月 } 北海道大学獣医学部助教授
平成8年4月 } 北海道大学大学院獣医学研究科教授
平成15年4月 } 北海道大学評議員
平成16年3月 }
平成16年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成18年3月 }
平成15年9月 } 21世紀COEプログラム拠点「人獣共通感
平成19年3月 } 染症制圧のための研究開発」拠点リーダー
平成20年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
平成22年3月 }

2010年3月末に定年退職を迎えるにあたり、回顧と謝意の辞を述べます。私は1980年10月に北海道大学獣医学部公衆衛生学講座に赴任して以来、一貫してウイルス性人獣共通感染症の研究を行って来ました。近年、世界の各地で新型の人獣共通感染症が発生し、大きな社会的問題となっております。このような新型の人獣共通感染症に対処するためには、原因病原体の自然界における宿主や人への伝播経路を明らかにするとともに、診断法を開発して疫学調査を行い、予防対策を早急に立案しなければなりません。獣医学研究科を中心に提出した「人獣共通感染症の制圧」に関するプログラムが21世紀COEとグローバルCOEに採用されました。私達の行って来た研究が社会に必要とされ、人獣共通感染症の予防対策立案のための資料となっていることを嬉しく思っています。

これまで私に研究と教育の場を与えてくれた北海道大学に感謝するとともに、日常的な活動に支援・協力していただいた教員、事務・技術職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

三^み島^{しま}瑛^{てる}人^{ひと}氏(情報科学研究科教授)



昭和21年7月28日生

(略歴)

昭和44年3月

北海道大学工学部卒業

昭和46年3月

北海道大学大学院工学
研究科修士課程修了

昭和49年9月 北海道大学大学院工学研究科博士課程修了

昭和49年9月 工学博士(北海道大学)

昭和49年10月 北海道大学工学部講師

昭和51年4月 北海道大学工学部助教授

昭和62年10月 北海道大学工学部教授

平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科教授

平成16年4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授

満18歳から45年間、最初は学生としてその後、教官(教員)としてお世話になりました。よい所も悪い所も出身学科である電子工学科風になってしまったようです。多くの電子工学科卒業生と同様に主として自分の力を頼りに生きてきた感じがします。さらに、組織的に活動することや運営面で働くことを避けながら定年まで勤めるつもりでした。しかし、自分自身の期待とは異なり、最後の年には全学的な委員を3つも掛け持ちすることになりました。全学的な場に出てみると自分がそのような委員になるには教育も受けていないし、勉強もしていないことに気がつきました。

大学は人材を育てて輩出する所であるとすれば、大学自身の運営を担う人材を育てることも必要と感じました。教育機関の運営を担う人材を組織的に育てるという役割も、これからの北海道大学には期待したいと思います。

北大を去るにあたって

ひろ よし かつ じ
廣 吉 勝 治 氏 (水産科学研究院教授)
(略 歴)



昭和50年3月
東京大学大学院農学系研究科農業経済学専門課程
博士課程単位修得退学
昭和50年4月 }
昭和51年3月 }
日本学術振興会奨励研究員
(所属：東京大学農学部)

昭和51年4月 }
昭和53年12月 } 財団法人日本総合研究所研究員
昭和54年1月 水産大学校講師 (農林水産教官)
昭和57年4月 水産大学校助教授 (農林水産教官)
昭和62年9月 東京水産大学水産学部助教授
平成3年4月 東京水産大学水産学部教授
平成7年7月 北海道大学水産学部教授
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

着任してから14年8ヶ月お世話になりました。北大の自由な校風の中で、水産経済の研究教育の維持に邁進出来たことは誠に有り難く、この間、私のような^{けんかい} 狷介、偏屈者とお付き合い下さった教職員の皆さんに深く感謝申しあげる次第です。赴任時はバブル経済崩壊の時代に入り、大学は独法化への攻勢が避けられなくなる情勢で「科学技術創造立国」と差別化政策を掲げる国の文教行政への迎合が顕わになるころでした。この頃から「国際化」ということで米国流儀に追随し、「競争的環境」への対応という形だけの業績主義が蔓延し、「外部資金導入」「産官学連携」「社会貢献」という形の財界・行政べったりが内部からも無頓着に志向される状況が強まったように感じます。当時、学部も高度知識人養成への対応の形づくりや大学院重点化に向けた改組の形をつくることに夢中でした。大学院・学部学科の改組も1度や2度ならず実施され構成員の方々はなにか落ち着かない時代に翻弄されている感じでした。大学は教室現場において自主的で息の長い研究教育の場としての固有の側面が損なわれるようなことがあってはならないと思われます。北大は歴史と伝統がこれからも培われるとすれば、純粹時間がゆっくりと流れる研究環境であって欲しいと思うものです。

やな だ みつる
築 田 満 氏 (水産科学研究院教授)



昭和21年7月8日生
(略 歴)
昭和45年3月
北海道大学水産学部水産化学科卒業
昭和45年5月 }
昭和46年3月 }
財団法人水産科学研究奨励会研究員

昭和48年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和53年3月 北海道大学大学院水産学研究科博士課程単位修得退学
昭和53年4月 }
昭和58年6月 } 函館市技術吏員
昭和53年6月 水産学博士 (北海道大学)
昭和58年6月 北海道大学水産学部助手
昭和61年9月 北海道大学水産学部講師
昭和62年7月 北海道大学水産学部附属北洋水産研究施設助教授
平成7年4月 北海道大学水産学部助教授
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成18年4月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

わが学究生活は、北大水産学部4年目卒業研究における青函海底トンネル調査杭工事に伴う漁業影響調査から始まり、1973年からの大学院時代における噴火湾における栄養成分の挙動に関する研究、それ以来の噴火湾における漁業生物資源と漁場環境に関する研究、1984年から函館湾上磯沖海域における水質環境の変動に関する研究、そして1988年からのベーリング海および北太平洋海域における基礎生産過程に関する研究など、ただひたすらに北大水産学部附属練習船 (おしよろ丸, 旧北星丸, うしお丸) に乗船し、毎年同じサンプリングおよび研究を続けていたにすぎなかったかもしれない。本当に「継続は力なり」であったのか?しかし、もしこのような長期継続的研究を評価してくれるならば、それはこのような研究手法を許してくれた寛大な北海道大学自体の良き雰囲気であるかもしれない。わが学究生活において、このような環境と北大水産学部附属練習船によって楽しいそして有意義な研究生活を送れたことに対して、卒業生を含めた関係各位に深く感謝申し上げます。

いけ だ もと よし 氏(地球環境科学研究院教授)



昭和21年7月24日生
(略歴)
昭和44年5月
東京大学工学部航空学科卒業
昭和46年3月
東京大学大学院工学系
研究科航空学専攻修士
課程修了

昭和49年3月 東京大学大学院工学系研究科航空学専攻博士課程修了
昭和49年3月 工学博士(東京大学)
昭和49年4月 東京大学宇宙航空研究所研究生
昭和54年8月 米国海洋大気局太平洋海洋環境研究所ポストドクター
昭和56年9月 ブリティッシュ・コロンビア大学海洋学科ポストドクター
昭和58年12月 カナダ水産海洋省ベッドフォード海洋研究所研究員
平成6年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成9年10月 国際北極圏研究センタープログラ
平成14年3月 ムディレクター
平成10年4月 北海道大学評議員
平成14年3月 北海道大学評議員
平成14年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科長
平成17年3月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成19年3月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授

同じ大学院の同僚にみなさんと共に、環境科学の教育について、さまざまな分野の協働による課題解決型を表に出し、かつ基盤となる学問分野と相互啓発しあう体制作りに貢献できたことが最も心に残っています。大学に籍を置く専門家は市民の声を聞くと同時に、市民に学術の利用価値を知ってもらう努力を積み重ねる責務を負っています。学生諸君には大学と市民の仲立ちをすることによって、専門家にまで育ってほしいと切望します。

航空から地球科学に分野を換え、その後も北米の研究所から日本の大学に職場を代えたことは、その時点では必然であったとしても、今になって顧みると人生経路の選択を行ったことがわかります。私が過ごした数々のところで出会った方々に感謝する今日このごろです。

のり き しん いちろう 氏(地球環境科学研究院教授)



昭和21年8月12日生
(略歴)
昭和44年3月
室蘭工業大学工業化学
科卒業
昭和44年4月
財団法人水産科学研究
奨励会研究員

昭和47年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和51年1月 北海道大学大学院水産学研究科博士課程単位修得退学
昭和51年2月 北海道大学水産学部助手
昭和51年9月 水産学博士(北海道大学)
昭和56年6月 北海道大学水産学部講師
昭和60年7月 北海道大学水産学部助教授
平成6年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授
平成17年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授

30年余北大に在職させていただきました。そして、分析化学を出発点にして、海と環境について化学的視点に立って研究を行ってまいりました。30年前には、環境問題は比較的狭い意味の公害問題としての意識しかなかったかと思いますが、今では、地球規模のシステムを含めた人類最大の問題の一つとして広く皆さんに認識されるようになりました。

自然、特に海を対象にした研究は、一人ではなにもできません。多くの学生や仲間、そして船舶関係者の協力のもと、時には船酔いという苦い経験もありましたが、充実した楽しい時をすごさせてもらいました。海洋環境に関するようなビッグサイエンスは、大学だからこそできる事、大学でなければできない事、の研究課題の一つかと思えます。これからも環境研究が北大の実学の目玉の一つとして、特色ある立場を維持していってくださることを期待しています。ありがとうございました。

うお さき こう へい
魚 崎 浩 平



氏 (理学研究院教授)

昭和22年 2月 1日生

(略 歴)

昭和44年 3月

大阪大学工学部卒業

昭和46年 3月

大阪大学大学院工学研

究科応用化学専攻修士

課程修了

昭和46年 4月 } 三菱油化株式会社
昭和53年10月 }

昭和51年10月 南オーストラリア州立フリンダ
ース大学大学院物理科学研究科
博士課程修了

昭和52年11月 Ph.D. (フリンダース大学)

昭和53年10月 オックスフォード大学博士研究
員

昭和55年 4月 北海道大学理学部講師

昭和56年10月 北海道大学理学部助教授

平成 2年 9月 北海道大学理学部教授

平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科教
授

平成11年 4月 } 北海道大学総長補佐
平成12年 3月 }

平成12年 4月 } 北海道大学触媒化学研究セン
ター長, 評議員

平成14年 3月 }

平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

1980年 3月20日過ぎに英国から帰国し、雪の札幌に来たのが昨日のように思い出されます。北海道は昔からあこがれの地で、学部・大学院生時代の“かに族”としての3度の長期旅行(計70泊以上)や、新婚旅行に来ており、北大に来られたことは本当にうれしいことでした。しかし、修士課程修了後民間企業に就職して以来3年以上同じ場所にいたことはなく、北大で30年を過ごすことになるとは当時全く考えていませんでした。

最初の10年半は教養部の化学教育を担当し、残りの19年半を化学科・化学専攻で物理化学の教育・研究を担当しました。素晴らしい同僚、学生に恵まれ、いくつかの国際的研究成果を残すことができました。また、創成科学研究機構の創設に関わったことも懐かしい思い出です。

全国から学生が集まってきているのが北大の特徴だと思います。この特徴を失うと単なる地

方大学になってしまいます。この30年で入学者の平均的学力は明確に低下し、補習など底上げ教育に追われるようになっていますが、意欲のあるトップクラスの学生を大きくのばすことにも力を注ぎ、北大が国内のみならず国外特にアジアからの優秀な学生が望んで集まる国際的な大学として益々発展されることを期待しています。

なが さか ゆき お
長 坂 行 雄

氏 (理学研究院教授)

昭和21年12月14日生

(略 歴)

昭和44年3月

北海道大学理学部卒業

昭和46年3月

北海道大学大学院理学
研究科数学専攻修士課
程修了

昭和46年4月 北海道大学理学部助手
昭和52年12月 理学博士(北海道大学)
昭和54年7月 北海道大学理学部講師
昭和56年4月 北海道大学医療技術短期大学部
助教授
平成3年7月 北海道大学医療技術短期大学部
教授
平成15年10月 北海道大学大学院理学研究科教
授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教
授

助手のころ、私の恩師は私の性格、家庭環境まで気づかって、北大に併設されることになった医療技術短期大学部への就職をすすめてくれました。この短大が医学部保健学科に改組されて閉校になるまでの25年間ここで主に一般教育の数学、統計学を担当しました。9名の一般教育の教員グループは、新しい医療の常識を持った医療技術者を育てていこうとする意気込みのなかで、それなりの役割を果たしたと思います。数学科に戻されてからは、浦島太郎でしたが、まわりに迷惑をかけながらでありましたがどうにか終わることができました。昨年の夏から耐震改修のため研究室が理学部本館に避難し、学生時代をすごしたこの建物で定年をむかえるのは感慨無量です。環境のいいところにながらまともな数学の研究はできなかつたことに悔いは残りますが、いい人にめぐり合い、支えられてきたことに心から感謝申し上げます。世の中どう変わろうと、北大は発展を続けていくと確信しております。

ま わたり しゅん すけ
馬 渡 駿 介

氏 (理学研究院教授)

昭和21年10月6日生

(略 歴)

昭和44年3月

北海道大学理学部卒業

昭和46年3月

北海道大学大学院理学
研究科動物学専攻修士
課程修了

昭和49年3月 北海道大学大学院理学研究科動
物学専攻博士課程修了
昭和49年3月 理学博士(北海道大学)
昭和49年6月 日本学術振興会奨励研究員
昭和50年4月 日本大学医学部助手
昭和55年11月 日本大学医学部講師
昭和57年4月 北海道大学理学部助教授
昭和63年4月 北海道大学理学部教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科教
授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教
授
平成19年4月 北海道大学総合博物館館長

小学4年の時、ゲルマニウムラジオのキットを組み立てて以来、電気回路の自作と音楽鑑賞にハマりました。中学では秋葉原通いを覚えてアマチュア無線免許を取り、高校では新宿のジャズ喫茶に入り浸ってアルテックA7から流れるモダンジャズを聴く日々を過ごしました。北大に入学してアマ無線はあきらめ、下宿の友人に感化されクラシックを聴くようになりました。大学院に入って調査研究に没頭し、一時音楽から離れましたが、就職後は良い音で音楽を聴きたいとの欲望が再び頭をもたげ、忙しさが続く中でアンプやスピーカーの自作を続けました。最近になって自作のレコードプレーヤーと真空管アンプにWEのレプリカスピーカーとLINNのDSを加えてオーディオ装置を組み、一応満足できるレベルに達したと自負しています。この度定年を迎え、4月からは小学生の原点に戻って電気回路の製作と音楽鑑賞三昧の生活を送るつもりです。



稲垣冬彦氏 (薬学研究院教授)
 昭和22年2月3日生
 (略歴)
 昭和45年3月
 東京大学理学部卒業
 昭和47年3月
 東京大学大学院理学系
 研究科修士課程修了
 昭和49年4月
 東京大学理学部助手

昭和51年11月 理学博士 (東京大学)
 昭和56年12月 } 民間(東レリサーチセンター研究員)
 昭和60年3月 }
 昭和60年4月 } 民間(東レリサーチセンター主任研究員)
 昭和61年1月 }
 昭和61年2月 } 民間(財団法人東京都臨床医学
 平成4年6月 } 総合研究所室長)
 平成4年7月 } 民間(財団法人東京都臨床医学
 平成11年3月 } 総合研究所部長)
 平成11年4月 北海道大学大学院薬学研究科教授
 平成18年4月 北海道大学大学院薬学研究院教授

平成11年4月より財団法人東京都臨床医学総合研究所より北海道大学大学院薬学研究科に赴任して以来11年間、北海道大学にお世話になった。国家プロジェクト「蛋白3000」を始めるにあたり、文部科学省よりの依頼を受け次世代ポストゲノム研究センターに併設してNMR研究施設を作ったことは特に印象に残っている。800MHz NMR 2台を備えた国立大学最大級のNMR施設である。蛋白3000プロジェクト「細胞内シグナル伝達」の中核機関として、NMR構造生物学に必要なタンパク質発現より、NMR測定、構造解析に到る一連の基盤技術の整備を行なうと共に北大内外の研究者と協力して蛋白3000プロジェクトの推進に努めた。現在も後継の国家プロジェクト「ターゲットタンパク研究プログラム」を進めている。退任後もしばらくは北大北キャンパスに残る予定である。北大北キャンパス大型設備のプラットホームにNMR研究施設を組み入れる事、そしてこれまで培ってきた構造生物学の基盤技術を北大の蛋白質研究者に提供し、北大の構造生物学を大いに盛り上げていきたいと考えている。今後も皆様の暖かい支援をお願いしたい。



三浦敏明氏 (薬学研究院教授)
 昭和21年11月14日生
 (略歴)
 昭和44年3月
 北海道大学薬学部卒業
 昭和46年3月
 北海道大学大学院薬学
 研究科修士課程修了
 昭和49年3月
 北海道大学大学院薬学
 研究科博士課程修了

昭和49年3月 薬学博士 (北海道大学)
 昭和50年1月 北海道大学教務職員
 昭和50年4月 北海道大学薬学部助手
 昭和53年11月 北海道大学薬学部助教授
 昭和63年4月 北海道大学医療技術短期大学部
 助教授
 平成6年6月 北海道大学医療技術短期大学部教授
 平成15年10月 北海道大学大学院薬学研究科教授
 平成17年4月 } 北海道大学機器分析センター長
 平成21年3月 }
 平成18年4月 北海道大学大学院薬学研究院教授
 平成20年4月 } 北海道大学大学院薬学研究院
 平成22年3月 } 副研究院長

学生時代も含めると、北大には45年間お世話になりました。薬学部で通算30年、医療短大で15年です。赴任した頃の医療短大ではコメディカル教育4年制化が大きな課題になっていました。私も設置構想づくりに加わり、関係者との交渉を繰り返しましたが、保健学科への改組が認められるまでには長い年月を要しました。しかし、この間、医師やコメディカルの方々、文系の先生方とも触れ合うことができたことは薬学に関わる者として貴重な経験でした。医療短大の4年制化がなり、15年ぶりに戻った薬学部では、薬剤師教育6年制や、生命科学学院や薬学研究院の設置、法人化など、次々と適切な対応が求められた時期でもあり、文書づくりに追われる日々が続きましたが、研究室を構え、育てて頂いた薬学部で最後の6年間を教育・研究に携わることができたのは幸せでした。

半世紀近くもの長い間、好きなことに自由に組み合わせて下さった北大に改めて感謝し、今後は同窓生の一人として北大の発展を応援したいと思えます。

さ の よし お
佐野芳雄氏 (農学研究院教授)



昭和22年3月30日生
(略歴)
昭和45年3月
北海道大学農学部卒業
昭和47年3月
北海道大学大学院農学
研究科修士課程修了

昭和50年10月 北海道大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学
昭和50年11月 国立遺伝学研究所遺伝実験生物保存研究施設研究員
昭和51年6月 農学博士(北海道大学)
昭和59年4月 国立遺伝学研究所遺伝実験生物保存研究センター助手
昭和63年2月 国立遺伝学研究所遺伝実験生物保存研究センター助教授
平成元年10月 国立遺伝学研究所総合遺伝研究系助教授
平成7年2月 北海道大学農学部教授
平成11年4月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

昭和45年に北大農学部を卒業し、大学院では大半の研究生活を農場で過ごしました。博士課程を終える頃は、環境破壊が深刻な社会問題になっており、国立遺伝学研究所で新設された系統保存研究施設に職を得て、その後20年近くをイネの系統保存と遺伝研究に携わりました。世界有数のコレクションを抱えて、地理的・生態的遺伝変異をフィールド調査を含めて研究し、栽培植物における生物多様性や遺伝資源の重要性を指摘してきました。平成7年に北大農学部に着任してからの15年間は、分子情報に基づいたイネの環境変化に対する適応機構や進化機構の研究を多くの学生とともに継続してきました。作物の多様な変異は、何千年にわたって、人と作物の多様な関わりの中で構築されてきたと考えられます。品種改良にとって多様性の重要性は、将来の北海道農業にとってますます大きくなるだろうと感じています。

ふじ かわ せい ぞう
藤川清三氏 (農学研究院教授)



昭和21年10月25日生
(略歴)
昭和44年3月
北海道大学農学部卒業
昭和46年3月
北海道大学大学院農学
研究科修士課程修了
昭和49年9月
北海道大学大学院農学
研究科博士課程修了

昭和49年9月 農学博士(北海道大学)
昭和50年7月 北海道大学低温科学研究所助手
昭和55年3月 } ロンドン大学医学部特別研究員
昭和56年4月 } (派遣)
平成2年1月 } コーネル大学農学部客員教授
平成3年1月 } (派遣)
平成7年8月 北海道大学低温科学研究所助教授
平成12年4月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

北海道夕張市に生まれ、札幌で育ち、北大理類に入学して以来、今日まで北大で御世話になり続けました。自己紹介で、未だ北大を卒業していないという冗談を言うことも有りましたが、退職をもって卒業の時を迎えました。北大では農学部学生時代の電子顕微鏡との幸運な出会い以来、低温科学研究所での2度の海外留学を含めた25年間、電子顕微鏡を用いた研究を中心に、生物の凍結適応の基礎研究を続けることができました。10年前に農学研究科(院)にカムバックさせていただいた前後からは電子顕微鏡中心の研究スタイルは卒業しましたが、電子顕微鏡を中心にした研究から得られた基礎研究の成果を礎に、樹木の寒冷環境適応の研究を続け、応用への道も拓ける段階まで何とかたどり着けたと考えています。節目節目でご教授、ご援助をいただいた多くの皆様に心から感謝するとともに、北海道大学の益々の発展を祈念いたします。

陳 省 仁 氏

(教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター教授)



昭和21年6月18日生

(略 歴)

昭和43年7月

台湾国立政治大学法学院卒業

- 昭和44年8月 } 台湾国立政治大学公共行政企業
- 昭和46年2月 } 管理教育中心専任助教
- 昭和46年2月 } 中華民國社區發展研究訓練中心
- 昭和46年9月 } 研究員
- 昭和50年2月 } オックスフォード大学社会人類学修士課程修了
- 昭和53年3月 } 広島大学大学院教育学研究科修士課程修了
- 昭和59年3月 } 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得退学
- 昭和59年5月 } 北海道大学教育学部助手
- 平成2年9月 } 教育学博士(北海道大学)
- 平成3年1月 } 北海道大学教育学部 助教授
- 平成4年5月 } 北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター助教授
- 平成10年6月 } 北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター教授
- 平成12年8月 } 北海道大学教育学部附属乳幼児
- 平成13年3月 } 発達臨床センター長
- 平成13年4月 } 北海道大学大学院教育学研究科
- 平成18年3月 } 附属乳幼児発達臨床センター長
- 平成18年4月 } 北海道大学大学院教育学研究科附属子ども発達臨床研究センター教授
- 平成19年4月 } 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター教授

1978年の夏、広島大学の修士課程を終えて親子関係研究のメッカといわれた北海道大学教育学部の発達心理学教室へやって来ました。1980年代初頭における国公立の大学教員の国籍条項撤廃により、1984年5月に北海道大学教育学部の助手となり、当時は北大の外国籍教官が2、3人のみの時代でした。

恩師、三宅和夫先生のご配慮により、新生児・乳児を対象者とした観察や行動計測を何年間も継続しました。欧米の研究者との連携が重

視された雰囲気の中で、何回も海外へ出かけていき、或いは外国の研究者の短期滞在を受け入れ、交流の中で研究者としての貴重な経験を得ました。

1991年に助教授昇進の前、漸く博士論文を仕上げました。1992年夏から、アムステルダム自由大学の運動科学部に訪問教授として約一年間滞在できたのも、赤ちゃんの泣きを身体運動として取り上げたために知り合ったBrian Hopkins教授の招聘によるものでした。

最初から関わってきた附属乳幼児発達臨床センターも改組され、教育学部が58年間運営してきた教育学研究のための「北大幼児園」もこの3月で閉鎖されます。多くの同僚及び学生院生に支えられ、充実した教員生活も一段落となり、今気になるのは子どもの声が聞こえない教育学部の行方です。皆様のご健闘を祈ります。

古賀弘人氏

(メディア・コミュニケーション研究院教授)



昭和21年12月19日生

(略歴)

昭和46年3月

東京外国語大学イタリア
語学科卒業

昭和46年4月 民間(株式会社早川書房, フリーの編集者・校正者として:株式会社晶文社, 株式会社集英社)
 平成3年2月 北海道大学言語文化部助教授
 平成3年4月 北海道大学言語文化部助教授
 平成8年2月 北海道大学言語文化部教授
 平成12年4月 北海道大学大学院国際広報メディア研究科教授
 平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

19年前、実務経験者として採用され、主に「西洋文学」それと「イタリア語」の2つの分野で授業をしました。中国文学の中野美代子先生のウラの講義で、先生は優に200名の学生を集め、私はせいぜい100名ほどでいつも完敗でした。やがて私の畑の「イタリア文化論」にシフトし、それと編集者を育てたいという妄執から、論文指導講義「編集者という仕事」「一冊の本が出来るまで」を延々と13年間続行、500余名の学生とけっこう親しく接したのがもっとも濃い体験となった。その末に勉強・研究は結局《書くということ》に辿り着き、結実するのだ、という結論に辿り着いたのが一昨年あたり。どうして早く気がつかなかったのか、この阿呆!!

大学生活のなかでもっとも苦手だったのが手続きというやつで、私は事務の方がたにさんざん迷惑をかけた。この場を借りてお詫びいたします(この原稿もメ切を過ぎています)。

いまや《往時茫茫》、昔の日々を憶いだそうとしても、はるかに遠すぎて、そこに何があったものやら覚束ない。何はともあれ、「諦念褪色」を迎えての偽らざる心境は、

《冬蜂の死にどころなく 歩きけり》鬼城

筑和正格氏

(メディア・コミュニケーション研究院教授)



昭和21年12月8日生

(略歴)

昭和44年3月

国際基督教大学教養学
部卒業

昭和46年3月

慶應義塾大学大学院文
学研究科独文学専攻修
士課程修了

昭和48年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科
独文学専攻博士課程退学
 昭和48年4月 北海道大学文学部講師
 昭和55年12月 北海道大学文学部助教授
 昭和59年4月 北海道大学言語文化部助教授
 平成6年11月 北海道大学言語文化教授
 平成11年4月 北海道大学言語文化部長, 評議員
 平成13年3月 北海道大学言語文化部長, 評議員
 平成12年4月 北海道大学大学院国際広報メ
ディア研究科教授
 平成14年4月 北海道大学大学院国際広報メディア
 平成18年3月 研究科長, 評議員
 平成19年4月 北海道大学大学院メディア・コ
ミュニケーション研究院教授

1973年4月に北海道大学に赴任した当座は、通称「馬糞風」が道路から砂埃を巻き上げ、それが目に入り髪に混じって閉口したものである。しかし、5月になるとあたり一面新緑に覆われる世界がやって来た。この、力強い芳香の世界への感激は今も甦ってくる。

37年間、北大に勤務して定年を迎えることになった。この間、何が自分を北大に引きつけていたのかと問えば、それは北大がもつ豊かさに違いない。日本一と称されるキャンパスの自然環境は言うまでもなく、北大には豊かな人材が揃っている。折に触れて、人材の豊かさを直に知り得たのは、この上ない幸運であった。感謝と喜びをもって回想するのは、教導、薫陶を頂いた方々のことである。この方々との出会いがなければ、我が人生はきわめて貧しいものになっていたことだろう。翻って、自分は少しでもその恩に報いるべく、北大に貢献できたのであろうか。肯定的に答えられればいいのだが。

北大を去るにあたって

^{にし} ^{ほり} **西堀 ゆり 氏** (情報基盤センター教授)



昭和21年 8月28日生
(略 歴)
昭和45年 3月
北海道大学文学部文学
科卒業
昭和47年 3月
北海道大学大学院文学
研究科修士課程修了

昭和50年 3月 北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
昭和51年 4月 北海道大学文学部講師
昭和55年 8月 北海道大学文学部助教授
昭和56年 7月 レディング大学文学修士
(Master of Arts)
昭和59年 4月 北海道大学言語文化部助教授
平成 6年12月 北海道大学言語文化部教授
平成 8年 6月 } 北海道大学総長補佐
平成 9年10月 }
平成15年 4月 北海道大学情報基盤センター教授
平成16年 4月 } 北海道大学情報基盤センター
平成21年 3月 } 副センター長

昭和40年に憧れの北大の門をくぐってから、早45年が経ちました。教養部、文学部英文科、大学院での学生時代、そして、教官となって34年、人生の全てをこの憧れの大学で過ごしました。いつどこで、オオバナエンレイソウや大好きなトゥレブが咲くのか、枝垂桜やエゾヤマザクラが満開になるのか、隅々まで知っているキャンパスの至る所に、人生の記憶が重なります。大好きなキャンパスで、好きな英語を教えて、数多くの学生達に囲まれて、これ以上の幸せはありませんでした。学生達目がキラキラするのが大好きで、様々な教授法を試みてきました。ふと気がつくと、英語授業、職員英語研修、教科教育法、大学院のゼミと、その数、優に万を超えました。真剣に学ぶ学生達に囲まれて、こんな幸せな教師生活はありませんでした。北大を去るにあたって思い出は尽きず、学生達、同僚の諸先生、お世話になった事務の皆様、感謝の思いでいっぱいです。長い間、有難うございました。

^{とき} ^た ^{ます} ^よ **常田 益代 氏** (留学生センター教授)



昭和21年 6月14日生
(略 歴)
昭和44年 3月
法政大学文学部卒業
昭和44年 4月 }
昭和45年10月 }
株式会社三彩社編集部員

昭和50年10月 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和60年 9月 ハーバード大学東アジア言語・文明学部インストラクター
昭和61年 9月 ウェルズリー大学教養学部講師
平成 2年 1月 聖十字大学学際的特別研究センター非常勤講師
平成 2年 9月 クラーク大学視覚芸術学科非常勤講師
平成 6年 8月 Ph.D. (ミシガン大学)
平成 7年 1月 } 宮崎国際大学比較文化学部助教授
平成 9年 9月 }
平成 9年10月 北海道大学留学生センター教授
平成14年 5月 } 北海道大学総長補佐
平成16年 3月 }

学部、修士、博士課程を日米の異なる大学で学び、米国東部のいくつかの大学で教職の仕事について後、北海道大学にきました。「国」「公」「官」とは縁のない人生でしたので、北大に赴任した当初はかなり面食らいました。北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP) を担当し、欧州、北米、アジア・オセアニアからの多数の留学生と一緒に楽しく学ぼううちに、12年余りの月日が早くも流れました。今日の地球的規模の問題は世界の人々の協調なくしては解決されません。北大における英語による授業科目群である「国際交流科目」を通じ、異なる立場にある世界各国の若者が相互に啓発し、考えを交わせるようになることを願っています。また、学生諸君、専門の知識を身につけるだけでなく、感性も磨いてください。五感に快くないことは地球上の万物にとっても好ましくないはず。そして諸先生方、学生を大事に、厳しく、鍛えていってください。皆さん、どうもありがとうございました。

かわ はつ きよ のり
川 初 清 典 氏

(高等教育機能開発総合センター教授)

昭和21年5月16日生

(略 歴)

昭和44年3月

東京教育大学体育学部
卒業

昭和46年3月

東京大学大学院教育学
研究科修士課程修了

昭和48年3月 東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得中途退学

昭和48年4月 京都大学教養部助手

昭和55年10月 教育学博士(東京大学)

昭和62年4月 北海道大学体育指導センター助
教授

平成17年4月 北海道大学高等教育機能開発総合センター教授



生まれ育った地に立する北大で奉職が叶い、定年に至って喜びと感謝にこの上ありません。体育を学び体育を歩み体育指導での完結に向け、課外体育と全学教育に邁進しましたが、「スポーツと医学」、「生体工学」・「生命人間情報科学」、「保健科学」での参加や担当の機会にも恵まれ夫々で本学の優れた教・職員、学生の皆様から分野の枠の拡大・深化への挑戦の意気込みを学び感じさせられて来ました。北大が掲げるフロンティア精神の崇高を強く思います。辞する今、世は目まぐるしく変化しますが、大地に根ざす本学が普遍的に御活躍・御発展を続けられること、陰から祈念し続けます。

あき ばやし ゆき お
秋 林 幸 男 氏

(北方生物圏フィールド科学センター准教授)

私は昭和41年に北大に入学して昭和52年3月に大学院を修了し、昭和53年6月から当時の演習林に勤務しました。この間、雨龍研究林に合計18年、中川研究林7年間、天塩研究林に2年半を勤務しましたから、27年半を道北の北三林ですごしたことになります。

私が勤務した間の研究林はそのあり方をめぐって揺れ動いてきたように思います。研究林の所有規模をめぐる国立大学間の平準化を目指した水平化運動、1980年代以降では中曽根行革や行政監察、2001年には北方生物圏フィールド科学センターへの統合と教員の農学部から環境科学院への所属替え、そして、国立大学自体の独立行政法人への移行などがありました。研究林内部でも研究林のあり方や立場を明確にするために、研究林＝「林業の経営試験」の場とする経営試験論と、研究林＝大型実験施設の場とする森林科学論との二つの軸をめぐって「演習林の将来構想」が議論されました。実験施設を運営する労働組織では林業技能補佐員による直営組織か、請負組織かも^{そじょう}狙上に上がりました。その中でも、天然林の回復こそ私の勤務していた間の主題であり続けましたが、残念ながら満足の行く回復の道筋がつけられていません。

いかに複雑な現代社会に生きる私たちでも、天然林を復元し、複雑な天然林の成長現象とその上に展開する多様な生態系の相互作用を保全し、後の世代につないでいくことが共通する課題でしょう。そうしたことを研究・教育する北方生物圏フィールド科学センターや研究林を支援していただけると幸いです。

なが さわ こう いち
長 澤 貢 一 氏



(学務部長)
昭和24年 5月31日生
(略 歴)
昭和43年 3月
室蘭栄高等学校卒業
昭和43年 8月
室蘭工業大学
平成元年 8月
室蘭工業大学会計課司
計係長

平成 6年 4月 北海道大学医学部附属病院管理課医療器材掛長
平成 7年 4月 北海道大学医学部附属病院管理課司計掛長
平成 8年 4月 室蘭工業大学会計課総務係長
平成 9年 2月 室蘭工業大学会計課課長補佐
平成 9年 3月 旭川工業高等専門学校学生課長
平成11年10月 帯広畜産大学学生課長
平成14年 4月 福島大学教務課長
平成17年 4月 北海道大学学務部キャリアセンター課長
平成19年 4月 北海道大学学務部学生支援課長
平成20年 4月 北海道大学学務部長

昭和43年に室蘭工業大学に採用になって以来、北海道大学で7年間、他大学等で35年間勤務いたしまして、平成22年3月31日に42年間の大学職員生活を終えることとなりました。

無事、職務を全うできたのも、良き上司、同僚、後輩の皆様に恵まれ、多くのご指導とご支援いただいたお陰であり、心から感謝申し上げます。

顧みますと、異動に伴って单身生活を長く送っておりましたが、赴任先で知り合えた職場仲間との交流を通じた、その土地の風土や人柄に触れることによって、見識が広がり良き思い出が沢山できたことは自分自身にとって大きな財産となっております。特に、最後の5年間を北大という素晴らしい大学で終えようとしていることは、私にとって、貴重な経験となり、大変幸せな時間を過ごせたことに心から感謝しております。

第二期の中期目標・中期計画が始まろうとしておりますが、北海道大学が世界に飛躍し、ますます発展することを祈念しております。本当に長い間有り難うございました。

ほん ま とし ふみ
本 間 敏 史 氏



(工学系事務部長)
昭和25年 2月 7日生
(略 歴)
昭和43年 5月
北海道大学教養部
平成 5年 4月
小樽商科大学会計課司計係長
平成 8年 4月
北海道大学経理部主計課第二予算掛長

平成10年 4月 北海道大学経理部主計課第一予算掛長
平成11年 4月 北海道大学経理部主計課専門職員
平成12年 4月 北海道大学経理部主計課総務掛長
平成13年 4月 室蘭工業大学会計課課長補佐
平成15年 4月 北海道大学総務部研究協力課課長補佐
平成15年10月 北海道大学研究協力部研究協力課課長補佐
平成16年 4月 北海道大学財務部主計課課長補佐
平成17年 4月 北海道大学農学研究科・農学部事務長
平成20年 4月 北海道大学工学研究科・情報科学研究科・工学部事務部長
平成21年 4月 北海道大学工学系事務部長

昭和43年5月に北海道大学に奉職し、今年3月で定年退職を迎える事になりました。無事にこの年を迎える事ができましたのは、良き上司、先輩、同僚、後輩の方々、さらに関係した先生方の暖かいご指導ご支援に支えられたお陰であると深く感謝申し上げます。

北海道大学には、約37年間在職させていただきましたが、平成15年4月に室蘭工業大学から研究協力課の補佐に戻ってきた年の7月には、次世代ポストゲノム研究棟の竣工式典を、更に11月には、創成科学研究機構棟の竣工式典も担うことになり、文部科学省など多くの関係機関との調整に大変苦勞し、同時に新生の創成科学研究機構の円滑な管理運営、振興調整費「R&B構想」の適正な運用管理など膨大な事務量をサポートするため、現在の北キャンパス合同事務部の設置に奔走したことが思い出深く、研究協力課にはたった1年間しかおりませんでした。ここでの経験は主計課で経験した17年間に匹敵するくらい充実した1年間だったと思っています。

最後になりましたが、法人化後の大学運営はますます厳しさを増すものと思われませんが、北海道大学のますますのご発展と皆様方の御健勝をお祈り申し上げます。大変お世話になりました。ありがとうございました。

やま だ すぎ かず
山 田 杉 一 氏

(理学・生命科学事務部長)

昭和24年4月23日生

(略 歴)

昭和45年4月

北海道大学水産学部

昭和55年5月

北海道大学庶務部人事課



昭和63年9月 旭川医科大学総務部庶務課人事第一係長
平成3年4月 北海道大学教育学部庶務掛長
平成5年4月 北海道大学庶務部人事課研修掛長
平成7年4月 北海道大学総務部人事課第二給与掛長
平成9年4月 北海道大学総務部人事課第一任用掛長
平成11年4月 北海道大学総務部人事課専門員
平成14年4月 北海道大学総務部人事課課長補佐
平成17年4月 北海道大学法学研究科・法学部事務長
平成20年4月 北海道大学理学・生命科学事務部長(兼事務課長)

大学事務職員としてきっかり40年間の勤務でしたが、仕事やスポーツを通じて学内外のたくさんの方々にご厚誼を賜わったことが常に心の支えとなっておりました。この間、時には歩くがごとくゆったりと、またある時には暗闇でジェットコースターに乗ったかのごとき迷走の中でと、様々な経験をさせていただきながら、皆様方のご支援・ご激励により定年を迎えることができました。

これまでご指導・ご高配いただいた諸先輩や同輩・後輩並びに配置先の各部局の部局長や先生方に衷心より感謝申し上げます。

また、毎年変わることなく四季折々の変化を色鮮やかに現出してくれる豊かな自然環境のキャンパス内で仕事が出来たことも大きな幸せでした。凜と聳える檜の大木や競い咲く花々など、安らぎと元気を与え続けてくれました。

我が国の中でも誇り得る独特の伝統を有する北海道大学が、世界の若人を惹きつける魅力のある大学として、ますます発展し続けることをお祈りしています。長い間ありがとうございました。

やま ざき けん じ
山 崎 賢 司 氏

(北海道大学病院総務課長)

昭和24年7月1日生

昭和43年3月

北海道立沼田高等学校卒

昭和43年4月

北海道大学経済学部

昭和47年5月

北海道大学医学部附属病院業務課



昭和50年4月 北海道大学医学部附属病院医事課
昭和53年5月 北海道大学医学部附属病院管理課
昭和57年5月 北海道大学経理課
昭和63年5月 北海道大学農学部植物園事務掛事務主任
平成2年10月 北海道大学企画課工事契約掛契約主任
平成5年4月 埼玉大学施設課企画係長
平成8年4月 文部省大臣官房文教施設部札幌工事事務所庶務係長
平成13年4月 千葉大学医学部附属病院医事課長
平成15年4月 弘前大学医学部管理課長
平成17年4月 秋田大学医学部企画管理課長
平成20年4月 北海道大学病院総務課長

昭和43年4月、経済学部図書掛に採用され、このたび定年退職することになりました。この間、埼玉大学、文部省並びに、課長職で3大学での勤務を含め42年間の勤務を終え、エルムの森で無事に定年を迎えることができました。これもひとえに、良き先輩、同僚、後輩に恵まれたことを始め、自分自身が健康であったこと、さらには家内に支えられたことにより、楽しく仕事できたお陰であると思っております。衷心より感謝申し上げます。

国立大学は平成16年度からの法人化により、北海道大学を取り巻く内外の環境も激変しており、今後も厳しい状況あると思いますが、「Boys, be ambitious!」の精神で乗り切っていただけることと思っております。

最後になりますが、定年前の数年間を北海道大学病院にて微力ながらも執務させていただき非常に充実し、かつ光栄に思う日々でした。今後も北大並びに病院がその特色を生かして益々発展されることを御祈念しますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。長い間お世話になり、本当にありがとうございました。

北大を去るにあたって

奥村 丈 東 氏

(文学研究科・文学部事務長)

昭和24年 5月15日生

(略 歴)

昭和45年 6月

北海道大学工学部

昭和51年 4月

北海道大学教養部

昭和55年 5月

北海道大学法学部



昭和59年 4月 北海道大学経理部主計課
 昭和61年 4月 北海道大学大型計算機センター庶務掛
 昭和63年 5月 北海道大学歯学部総務課庶務掛
 平成 4年 4月 北海道大学工学部総務課研究協力掛
 平成 5年 4月 帯広畜産大学庶務課学事係長
 平成 7年 7月 北海道大学総務部研究協力課専門職員
 平成10年 4月 北海道大学総務部研究協力課研究協力総務掛長
 平成12年 7月 北海道大学総務部総務課専門員
 平成16年 4月 北海道大学総務部総務課課長補佐
 平成17年 4月 北海道大学遺伝子病制御研究所事務長
 平成19年 4月 北海道大学医学系事務部総務課長
 平成20年 4月 北海道大学文学研究科・文学部事務長

私は、帯広に2年程出た外は、全て北大で勤務することができました。その中で一番印象に残るのが、財団法人の設立に係る仕事できたことです。現在のクラーク記念財団を全く訳も分からない状態から設立できたときは、天にも昇る心地でした。

しかし、平成16年に北大が法人化され、寄附を募ることが許されることになったことで、財団法人の役目は、大方削がれてしまいました。その時は、国立大学が法人化されるなんて夢にも考えられませんでした。

また、二番目に印象に残るのは、この法人化の前後に総務課に在職していて、その準備と法人化後の実務に携わったことでもあります。法人化前の3月の評議会で、200本近くの規程を13時30分から21時までの7時間30分間にわたり審議・可決したときも、良くやったなという心境でした。この他に色々なことが沢山ありますが、上手くいった話ばかりでなく、拙かったことも沢山あり、今考えると冷や汗ものもありました。それもこれも、先輩、上司、同僚、部下に助けられ、お互いに汗をかいてきた賜とっております。この紙面を借りまして色々とお世話になり本当にありがとうございました。

石川 雄 一 氏

(法学研究科・法学部事務長)

昭和25年 3月 2日生

(略 歴)

昭和43年 3月

北海道網走向陽高等学校卒業

昭和43年 4月

北見工業大学庶務課

昭和46年11月

北海道大学庶務部人事課



昭和50年 5月 } 大臣官房人事課審査班(併任)
 昭和51年 3月 }
 昭和54年 5月 北海道大学庶務部人事課研修掛企画主任
 昭和55年 4月 北海道大学経済学部庶務掛人事主任
 昭和58年 4月 北海道大学庶務部人事課第一給与掛定数運用主任
 昭和58年10月 北海道大学庶務部人事課第一任用掛定員運用主任
 昭和63年 4月 旭川医科大学総務部庶務課人事第二係長
 平成 2年 4月 北海道大学法学部庶務掛長
 平成 5年 4月 北海道大学庶務部庶務課法規掛長
 平成 7年 4月 北海道大学総務部総務課法規掛長
 平成 8年 4月 北海道大学総務部人事課第二任用掛長
 平成 9年 4月 北海道大学総務部人事課第一給与掛長
 平成10年 1月 北海道大学総務部総務課総務掛長
 平成12年 4月 旭川医科大学総務部庶務課課長補佐
 平成15年 4月 北海道大学総務部人事課課長補佐
 平成16年 4月 北海道大学病院総務課課長補佐
 平成18年 7月 電子科学研究所事務長
 平成20年 4月 法学研究科・法学部事務長

昭和46年11月、北見工業大学から本学に転任となり、その後、旭川医科大学に二度5年間の勤務を経て、このたび定年退職を迎えることとなりました。この間、人事及び庶務の職務を主に、様々な経験をさせていただき、大過なく定年を迎えることができるのは、ひとえに良き上司、先輩、同僚、後輩に恵まれたためと、心から感謝申し上げます。

この4月からは、新たな第二期の中期目標・中期計画期間に入り、予算等でますます厳しくなるのではないかと危惧しておりますが、皆様の英知を結集し、この困難を克服されることを願うとともに、本学のさらなる発展を願っております。

最後になりますが、皆様のますますの御健勝と御活躍を祈念しております。長い間、ありがとうございました。

と お や ま せ つ の り
遠 山 節 徳

氏(環境科学事務部事務長)

昭和24年4月29日生

(略歴)

昭和43年3月

北海道美唄東高等学校
卒業

昭和43年4月

北海道大学歯学部



昭和48年8月 北海道大学施設部企画課
昭和52年5月 北海道大学経理部経理課
昭和56年2月 北海道大学工学部経理課
昭和59年5月 北海道大学経理部経理課
昭和62年5月 北海道大学農学部附属演習林苦
小牧地方演習林事務掛会計主任
平成元年4月 北海道大学工学部経理課用度掛
調達企画主任
平成元年5月 北海道大学工学部経理課第二用
度掛調達企画主任
平成3年4月 北海道大学施設部企画課工事司
計掛工事予算主任
平成5年4月 北海道大学施設部企画課工事契
約掛契約主任
平成6年4月 室蘭工業大会計課情報処理係
長
平成9年4月 北海道大学施設部企画課工事司
計掛長
平成11年4月 北海道大学工学部経理課用度掛
長
平成12年4月 北海道大学工学研究科・工学部
経理課用度掛長
平成14年4月 北海道大学経理部第一契約課政
府調達掛長
平成15年4月 北海道大学経理部第二契約課専
門員
平成16年4月 北海道大学監査室専門員
平成16年7月 北海道大学監査室長兼務
平成17年4月 北海道大学財務部経理課課長補佐
平成18年4月 北海道大学低温科学研究所事務長
平成20年4月 北海道大学環境科学事務部事務長

昭和43年4月、歯学部に採用され、このたび
定年退職することになりました。

この間、緑豊かな札幌キャンパスでの37年
間、北方圏苦小牧研究林(旧苦小牧地方演習
林)と室蘭工業大学の5年間、延べ42年間の勤

務を終え、無事定年を迎えます。勤務した42年
間は色々ありましたが、無事定年を迎えられま
すのも、自身が健康であったこと、そして何よ
り、良き上司、先輩、同僚、後輩の暖かい励ま
しと仕事上で立ち止まると「それ行け」と尻を
叩いて前進させていただいたお陰であると思っ
ております。また、勤務先でご指導いただきま
した、部局長をはじめ諸先生のご協力も心より
感謝申し上げます。

来年度から第2期中期目標期間が始まり、事
務等の業務も様々な形で変化して行くと思われ
ますが、北海道大学の伝統を活かして益々発展
することと、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り
申し上げます。

長い間、大変お世話になり、ありがとうございました。

北大を去るにあたって

やま ざき
山 崎

さとし
敏 氏 (教育学事務部事務長)



昭和24年 7月16日生
(略 歴)
昭和43年 3月
北海道寿都高等学校卒業
昭和43年 4月
北海道大学庶務部人事課
昭和43年 4月
北海道大学庶務部庶務課

昭和46年 5月 北海道大学法学部
昭和49年 5月 北海道大学医学部附属病院管理課
昭和50年 4月 北海道大学医学部附属病院総務課
昭和54年 5月 北海道大学理学部
昭和58年 4月 北海道大学施設部企画課
昭和59年 4月 北海道大学施設部企画課総務掛
文書主任
昭和62年 4月 北海道大学庶務部入試課第一入
試掛企画調査主任
平成 2年 4月 北海道大学庶務部庶務課総務掛
文書主任
平成 4年 4月 北見工業大学庶務課学事法規係長
平成 7年 4月 北海道大学工学部総務課研究協
力掛長
平成 8年10月 北海道大学総務部総務課広報調
査掛長
平成10年 4月 北海道大学総務部総務課広報掛長
平成12年 4月 北海道大学総務部総務課総務掛長
平成13年 4月 北見工業大学総務課課長補佐
平成16年 4月 北海道大学学術国際部留学生交
流課課長補佐
平成16年 7月 学術国際部国際企画課留学生交
流室室長補佐
平成19年 4月 学術国際部国際企画課課長補佐
平成20年 4月 教育学事務部事務長

昭和43年 4月に北海道大学 (事務局庶務課) に採用され、2回の北見工業大学勤務 (通算6年間) を含め42年間お世話になり、定年を迎えることとなりました。

この間、採用早々、大学紛争により事務局が封鎖され職場を転々とし、書類保管庫として借りた民間会社の独身寮の一室にトラックで朝晩通ったこと、病院勤務では、迷子の院内放送をした際「今の放送は訛っていたぞ」の指摘 (某職員から) を受けたこと、施設部勤務では、冬場の札幌市下水道の水質検査に同行した際、構

内マンホールの位置探しに苦勞したこと、入試課勤務では、教授・助教授の先生方を顎で使い、「お疲れ飲み会」の際、某教授から「鬼軍曹」と呼ばれたこと、北見工業大学勤務では、法人化に向けた準備作業に追われたこと、等々、懐かしく思い出しています。

無事に定年を迎えることができましたのは、ひとえに諸先生、上司、先輩、同僚、後輩のご指導、ご協力、ご支援のおかげと心から感謝しております。

最後になりますが、北海道大学の益々の発展を祈念して、定年に当たっての言葉とさせていただきます。

やま もと え りゅう
山本 恵 隆 氏

(北方生物圏フィールド科学センター事務長)



昭和25年1月27日生
(略歴)
昭和43年4月
北海道大学経理部経理課
昭和54年5月
北海道大学経理部主計課
昭和55年5月
北海道大学医学部附属
病院医事課

昭和58年7月 北海道大学経理部管財課
昭和61年4月 北海道大学経理部経理課
昭和63年4月 北海道大学歯学部総務課予算運用主任
平成2年4月 北海道大学経理部経理課収入管理主任
平成5年4月 北海道大学医学部附属病院総務課登別分院事務掛長
平成9年1月 北海道大学医学部附属病院総務課企画調査掛長
平成9年4月 北海道大学医学部附属病院管理課管理掛長
平成12年4月 北海道大学経理部第一契約課管理掛長
平成13年4月 旭川医科大学業務部医事課課長補佐
平成16年4月 北海道大学病院管理課課長補佐
平成17年10月 北海道大学病院経営企画課課長補佐
平成20年4月 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター事務長

昭和43年4月、経理部経理課に採用となり、以来43年に亘り主に会計・経理系の仕事に携わり、この度定年退職することになりました。無事に今日を迎えることができましたことは、その時々の上司、先輩、同僚、後輩の皆様の「人」に恵まれ、支えられ楽しく仕事の出来る職場環境であつたればこそと、これまでお世話になりました皆様へ心より感謝申し上げます。

顧みますと、2度の地方勤務で楽しい？単身赴任を経験し、病院事務には全体の約半分にあたる19年余り勤務しましたが、中でも「登別分院の廃止」という歴史の幕を閉じる業務に携わつたことは、今思い起こしても大変感慨深いものがあります。

最後になりますが、大学は第一期中期目標期間を終え第二期に入り、これまで以上の結果責任が求められ、大学を取り巻く環境も一段と厳しくなることが予想されますが、北海道大学が皆様の英知を結集し、国内はもとより、国際的にも大きく飛躍することを祈念すると共に、皆様方のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

わた なべ よし はる
渡邊 良 晴 氏

(北海道大学病院診療支援部長)



昭和24年11月17日生
(略歴)
昭和50年3月
北海道大学医学部附属診療放射線技師学校卒業
昭和50年4月
北海道大学医学部附属
病院放射線部エックス
線助手

昭和50年7月 北海道大学医学部附属病院放射線部診療放射線技師
平成2年7月 北海道大学医学部附属病院放射線部主任診療放射線技師
平成12年4月 北海道大学医学部附属病院放射線部副診療放射線技師長
平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院診療支援部副診療放射線技師長
平成16年4月 北海道大学病院診療支援部副診療放射線技師長
平成17年4月 北海道大学病院診療支援部診療放射線技師長
平成19年4月 北海道大学病院診療支援部長

昭和50年4月に採用になって以来、北大キャンパスの自然の中で四季折々の景色と共に過ごすことができたことは幸せでした。北大病院は平成元年から10年間をかけて建て替えられ、今や昔の病院を知っている方も少なく成りました。その後も医科・歯科附属病院の統合、平成16年の法人化とめまぐるしく状況が変わり、社会の医療を取り巻く環境の変化と共に北大病院も大きく変化しているのを実感しています。

北大病院は、北海道地区の基幹病院として診療と共に教育・研究を行うことが求められています。しかし、我々の働く臨床現場では業務の効率化と共に高度化した専門技術への対応、医療安全への取り組みなど多くの事が求められており、最近の10年間はこれらの対応に追われた日々でした。いままで沢山の皆様にご支援いただき、無事に定年を迎えることができますことを心から感謝いたしております。北海道大学が北海道大学病院が更なる発展をしていくことを願っております。

しま ざき かく こ
島 崎 佳久子 氏 (子どもの園保育園園長)



昭和24年9月5日生
私の保育者としてのスタートは、北星短期大学付属保育専門学校で保育を学んだことから始まります。そこで、良き師や先輩方、かけがえのない級友達と出会い、産休

明け保育の意義と必要性を学び、集団保育の意義に確信を持ちました。

人は、人と人の間で生き、支えあいながら成長発達し人格を作り上げていきます。その土台となるのが乳幼児期の保育園時代だと思います。

北大保育所「子どもの園」は、教育学部の著名な当時教職員組合委員長であった鈴木朝英氏による命名で、約52年前に授乳所としてスタートしました。

私が北大保育に入ったのは、37年前、アルバイトとしてでした。そこで、産休明け保育に尽力された多田泰子先生や、多田先生の退職後、園の中心となった斉藤満喜子さん、二ッ川さん、飛鳥さんなど、熱意ある方々と出会いました。教職員組合のみなさん、仕事を愛し、仕事も家庭も子育ても大切に思う女性教職員の方々、保育や子育てを通し、私自身育てていただきました。

当時から、保育園は常に資金や運営に悩みを抱えてきましたが、運営やバザーやカンパなど、組合、保護者の皆様方に支えていただきました。

約10年前、私は札幌保育連絡会の一員として札幌市へ働きかけを行い、産休明け保育を認可園でも行なう事ができるようになりました。当時、無認可保育園だった北大保育所は、産休明け保育を中心に行なっており、北大教職員の子どもの保育をしていました。当時の子ども達が大きくなって、活躍している姿や、学生や研究者として北大に戻ってくることもあり、園の保護者として合えることもあり、大変嬉しく思いました。

北大の教職員の方々が、安心して仕事や研究に携われる、そのことを評価されたのでしょうか、北大保育所は、平成17年に認可保育園となりました。これは、当時の中村陸男総長の英断

なくしては実現しませんでした。また、計画と実行の膨大な実務を多忙な中でも難なくこなし、短期間で認可を行なった総務課広報室長南俊夫氏はじめ、職員課、事務局の方々、そしてその後の運営事務をこなす職員の皆様にも、厚くお礼を申し上げます。

37年間、私は保育園と共に歩み、たくさんの子どもたちと出会い、一緒に成長させていただきました。楽しいことや嬉しいこと、時には辛いこともありましたが、そんな時、心を癒してくれたのは、大学構内の木々や野草でした。最近は特に、北大の校章でもあるエンレイ草に魅せられています。

北海道と共に歩み、世界で活躍する北海道大学。おおらかな大地に根を張り、英知の先端を歩き、良き校風で多くの人材が集う構内にある保育園が、よりいっそう、子ども時代を生き生きと子どもらしく過ごせるよう、その役割を果たして行ってほしいと思います。

最後に、父と母と家族の支えや協力なくしては今日という日は無かったと思います。ありがとう。

寄稿

北大での研修を通じて感じたこと

学務部キャリアセンター 中原 貴弘

◎はじめに

平成21年7月1日より学務部キャリアセンターにて研修させていただいております中原貴弘です。北海道大学と株式会社ディスコとの間で実施している相互派遣研修プログラムの一環で派遣されて参りました。着任してはや9カ月が過ぎ、すっかりキャリアセンターの一員として馴染んでしまいました。派遣期間があと3カ月を残すのみとなってしまったことがとても残念で堪りません。

さて、まずは自己紹介として、所属している株式会社ディスコについて少しご説明させていただきます。株式会社ディスコは学生向けの就職情報サイト『日経就職ナビ』を日本経済新聞社と共同運営したり、就職・転職支援を行うなど、いわゆる総合人材サービスを手掛けております。さらに、教育機関の志願者募集支援や、企業の採用業務支援も行っています。一例として、本年度の秋に東京、大阪、名古屋で開催された北海道大学進学相談会の運営も当社がお手伝いしておりました。私自身は本学へ派遣される直前の2年間は、企業の新卒・中途採用業務を成功させるべく、人事担当者と一緒に選考の仕組みや広報手段を考えたりしておりました。顧客としてはメガバンク、生損保、自動車メーカー、電機メーカーなど数社を担当しておりました。

◎学生と接する責任感

キャリアセンターに着任してみて最もやりがいを感じるのは、学生の進路選択の現場に立つことで、学生の成長を肌で実感できることです。個別の就職相談などを通じて、直接的に手ごたえを感じられるのは、とてもやる気をかき立てられます。着任して間もない頃、最終面接で何度も落ちたと悩む、ある修士2年生に面接の相談に乗る機会を得ました。彼はある程度自分の考えを言葉で説明できていたので、どうすればより説得力のある話し方ができ、相手に印象を残せるかを中心にアドバイスしました。その1週間後『やっと意中の食品メーカーから内定を得た』と連絡をもらえたときには自分のこ

とのようにうれしく思いました。学生と接するのは本人の将来を左右することにつながりますので、責任を感じながら接するように心掛けております。

秋からはキャリアセンター業務が本格化しました。12月から1月にかけてはキャリアセンターにとって主要な事業である企業研究セミナーの運営にもかかわりました。さらに、今年度から新設した小規模講座で業界研究講座の講師も一部担当しています。6月までは息をつく間もなく忙しい毎日が続きそうです。

北海道大学は部局が多く、学生のニーズは多岐に渡ります。就職活動に取り掛かる時期ひとつを取っても、10月から動く学生がいれば、年明けになって初めてキャリアセンターへ顔を出す学生もいます。学部生、院生でも就職への志向は異なります。学生のニーズを的確に把握し、キャリアセンターは何ができるのか、何をすべきなのかを、キャリアセンターの一員として日々考えを巡らせる毎日です。

◎残り期間も全力で

この1年間、株式会社ディスコにとっての顧客である大学生にとっても近いところに身を置けることは、何事にも代え難い貴重な体験であると感じております。残りの期間、できる限り勉強させていただき、帰任後には、例えばキャリアセンターと共同の企画を立ち上げるなど、北海道大学にとってメリットとなることができたらと考えております。

今後、何かの折に、ご一緒にお仕事させていただくときには、何卒ご指導のほど宜しくお願いいたします。



学生の相談に乗る中原氏

告 示

告 示

北海道大学告示第1号

北海道大学共同利用施設等管理規程（昭和38年海大達第3号）第2条の規定に基づき，共同利用施設等の名称並びに共同利用施設等の管理部局及び主要利用部局を次のとおり指定する。

平成22年3月1日

北海道大学総長 佐伯 浩

共同利用施設等の名称	管理部局	主要利用部局
核燃料物質貯蔵施設	大学院工学研究科	大学院医学研究科，大学院歯学研究科，大学院工学研究科，大学院獣医学研究科，大学院水産科学研究所，大学院地球環境科学研究所，大学院理学研究所，大学院薬学研究所，大学院農学研究所，大学院保健科学研究所，低温科学研究所，遺伝子病制御研究所，アイソトープ総合センター，北方生物圏フィールド科学センター，北海道大学病院

表 敬 訪 問

〈国内〉

月 日	来 訪 者	目 的
22.2.9	北洋銀行 頭取 横内龍三氏	表敬
22.2.18	文部科学省 科学技術・学術政策局 戦略官 岡谷重雄氏	先端融合領域イノベーション創出拠点の形成事業現地調査, SCOE(北大 R&BP 構想) 関係者との懇談, 創成研究機構視察等



北洋銀行頭取 横内龍三氏(左から1人目)

文部科学省 科学技術・学術政策局 戦略官
岡谷重雄氏(左から2人目)

(学術国際部研究協力課, 総務部広報課)

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
22.2.2	ジョセフフーリエ大学 (フランス) Eric Beaugnon 副学長	国際シンポジウム参加のため
22.2.4	駐日セルビア共和国大使館 イワン・ムルキッチ 大使	両国の教育・研究に関する懇談
22.2.5	駐日南アフリカ共和国大使館 ガート・グロブラー 大使	両国の教育・研究に関する懇談
22.2.5	駐日キューバ大使館 タニア・ドミンゲス・ ロサス 文化・科学技術参事官	両国の教育・研究に関する懇談
22.2.8	スイス連邦工科大学材料研究センター R. Spolenak センター長	国際シンポジウム参加のため
22.2.8	インドネシア政府奨学生モニタリングチーム 一行	インドネシア政府奨学生に係る視察
22.2.10	韓国全国国公立大学教授会連合会 一行	大学法人化に関する調査のため
22.2.16	駐日イスラエル大使館 ニシム・ベンシトリット 大使	両国の教育・研究に関する懇談
22.2.22	ライス大学 (アメリカ) 電気・コンピューター 学科 河野 淳一郎 教授 ほか	米国大学院教育に関する講演のため

(学術国際部国際企画課)



ジョセフフリーエ大学(フランス)
Eric Beaugnon 副学長(左側)



駐日セルビア共和国大使館
イワン・ムルキッチ 大使(中央)



駐日南アフリカ共和国大使館
ガート・グロブラー 大使(右から4人目)



駐日キューバ大使館 タニア・ドミンゲス・ロサス
文化・科学技術参事官(右から2人目)



スイス連邦工科大学材料研究センター
R. Spolenak センター長(右から6人目)



インドネシア政府奨学生モニタリングチーム
一行(右側)



韓国全国国立大学教授会連合会 一行



駐日イスラエル大使館
ニシム・ベンシトリット 大使(中央)



ライス大学(アメリカ)電気・コンピューター学科
河野 淳一郎 教授(右から1人目)

諸会議の開催状況

経営協議会 (平成22年1月20日)

- 議 題・重要な財産(土地)を譲渡する計画について
- ・第二期中期目標・中期計画について
 - ・平成22年度年度計画の重点事項について
 - ・入試手当額の見直しについて
- 報告事項・世界大学ランキングについて
- ・生涯メールサービスの導入について
 - ・北大フロンティア基金寄附受入状況について
 - ・平成21年度主な入試広報活動について
 - ・科学技術振興調整費評価結果報告書について
 - ・最先端研究開発支援プログラムの研究支援担当機関について
 - ・産学連携本部の活動状況について
 - ・地域産学官共同研究拠点整備事業の採択について
 - ・役員及び職員の給与について
 - ・平成22年度政府予算案について

役員会 (平成22年2月8日)

- 協議事項・電子科学研究所の改組について
- ・「国立大学法人北海道大学における評価に関する基本的な考え方」について
- 報告事項・連携講座の設置について
- ・時限分野及び時限講座の改組について
 - ・平成21年度実施大学機関別認証評価評価結果(案)について
 - ・国立大学法人評価委員会の報告について
 - ・北海道地区国立大学法人等の共同調達について

教育研究評議会 (平成22年2月18日)

- 議 題・環境健康科学研究教育センター(仮称)の設置について
- ・電子科学研究所の改組について
 - ・北海道大学共同利用施設の指定について
 - ・大学間交流協定の新規締結について
 - ・平成22年度北海道大学予算編成方針について
 - ・教員の懲戒について
- 報告事項・全学運用教員の措置について
- ・株式会社電通北海道との連携協定の継続について
 - ・生涯メールサービスについて
 - ・連携講座の設置について
 - ・時限分野及び時限講座の改組について
 - ・寄附講座の更新について
 - ・平成21年度実施大学機関別認証評価評価結果(案)について
 - ・国立大学法人評価委員会総会の報告について

役員会 (平成22年2月22日)

- 議 案・環境健康科学研究教育センター(仮称)の設置について
- ・電子科学研究所の改組について
- 協議事項・国際新体制組織について
- ・休職制度の改正について
 - ・就業規則関連規程の一部改正について
- 報告事項・創成研究機構による人獣共通感染症リサーチセンターの評価結果について
- ・事業所内保育所委託事業者の決定及び保育所の名称について
 - ・平成20事業年度決算剰余金の繰越承認について

規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

学 内 規 程

国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程

(平成22年2月9日海大達第4号)

人事委員会における選考は、全学的な視点からの選考であるという理由から、選考結果について経営協議会及び教育研究評議会に報告することとしてきましたが、現状においては運営組織に配置する特任教員等の選考を行っており、これら運営組織に配置する教員等の選考は必ずしも全学的な視点からの選考であると言い難いものとなっていることから、人事委員会の選考結果について、経営協議会及び教育研究評議会への報告を行わないこととするに伴い、所要の改正を行ったものです。

人 事

平成22年2月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 大学院地球環境科学研究所助教	七 分 勇 勝	採用

平成22年2月28日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 (辞職)	西 澤 豊 彦	大学院水産科学研究所准教授
【助教】 (辞職)	西 信 也	北海道大学病院助教
【技術職員】 (辞職)	内 浦 寿 子	北海道大学病院看護部看護師

平成22年3月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 大学院獣医学研究科助教	村 田 史 郎	採用

〈編集メモ〉

▼3月31日に、「リテラポプリ40号」が発行されました。今回で4回目となる新入生歓迎号の内容は、脇田副学長と学生2人の対談、全学教育の先生と新2年生全クラスの学生からの新入生に向けたメッセージという構成です。講義や定期試験などで忙しい時期に、誌面に登場する約70名の先生、学生さんのほか、各クラス担任の先生にもご協力いただき、無事に発行することができました。ありがとうございました。今号のリテラポプリは、4月8日に札幌コンベンションセンターで行われる入学式に出席される新入生と保護

者の皆さんにお渡しするほか、学部の窓口などで配布します。

▼先月号の編集メモでご案内した北海道大学美術部「黒百合会」の有志による「飲みにくい器展」が3月19日に終了しました。9日間という短い開催期間にもかかわらず、テレビ、ラジオなどで取り上げていただき、会場である交流プラザ「エルムの森」には多くのお客さんが訪れていました。最終日に行われた飲みにくい器を使った茶話会には、美術部OB、一般の方々が参加され、賑わっていました。



2008. 8. 10 襟裳岬

——— 北の息吹㊦ エゾコゴメグサ (*Euphrasia maximowiczii* var. *yezoensis*) ———

襟裳岬でこの花を始めて見たときには驚いた。コゴメグサは高山地帯の花であり、海岸などには生えないと思いこんでいたからである。本州には日本固有のコゴメグサが3種あり、地域に特有の変種もいくつかあるが、いずれも風の強い高山の稜線でお目にかかることが多い。特徴のある花の基本形はこの仲間全てに共通しており、コゴメグサの仲間だと一目で分かる。写真の変種は本州には分布しないマキシモビッチ種の変種であり、北海道の海岸から亜高山まで分布するのだそう。

理事・副学長 岡田 尚武

北大時報㊦ **March 2010 No.672**

平成22年 3月発行

北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/